

資本論における方法と世界観（上）

——その残された諸問題の一つについて——

梯 明 秀

〔本稿は、昨年二月末に最終講義として話したものの原稿に、若干の添削を加えておいただけのものである。ここに本誌に掲載させていただくことになったのであるが、それが長文になっているし、また読者の立場をも考えて、「まえおき」、「一」、「二」……というように分節して、それぞれ、適当な標題を付けておいた。〕

まえおき

ただいま建林学部長からのご紹介で、本学部主催としての、この最終講義の趣旨ということに触れていただいたわけであ

資本論における方法と世界観（上）（梯）

りますが、とくに、ぼくのために、このような催しをしていただいたことに心から嬉しく思うものであります。

ことは、ぼくだけじゃなくて、戦後の立命館を育てる、といっても、それは、いろいろな形であります。それぞれ相應の努力をしてきた同僚の諸君が、全学の各学部をつうじて、併せて合計八名もの諸君が、同時に停年退職することになっていきます。そのうち経営学部の三島君は、三月以前に生まれました。また昨年立命を去られた。あとは四月以後の生まれなので、続けて六十六才にまたがった一年間にも、立命館の俸給をもらうという特典にあづかったことになっていきます。早

生まれということとは損をするんで、三島君を入れて全部が寅の年であります。その中には経営学部の小椋先生だけは、酒を飲みそうな顔をしているけれども全然飲みません。しかしその他の諸君は酒を飲むようだし、その中でも二、三の者は、酒飲むとウルトラになる。ぼくは、そのウルトラになる一人でした。在職十七年数ヶ月の前半は、たしかに、そうであった記憶が、いくらか思い出されます。ただいま、戦後の立命館大学を育てるために何らかのことをやってきた、というような口幅つたいことを申しましたけれども、たびたびウルトラになって若い事務職員や同僚の方々に迷惑かけたことが、たびたびありました。そのおかげで五十二才で病気になるって、その後の病院通いや、その他のことで、おそらく、ぼくが立命館の健康保険の相当額を使うのではないかと思えます。シラフの時でも勝手気ままな性格だし、会議でも口数の多いという点でも、皆さんに迷惑をかけてきた人間なんで、だから、ぼく自身の気持だけから言うのですが、ぼくとしては、いい面もあったし、悪い面もあったし、平均すると普通の人間の仲間に入るのでないかと思えるし、そうした一人の普通の人間として、今回、停年退職で、立命館を出てゆくだ

けのことであります。

さて、これから最終講義に移るわけですが、ここに、こういうように沢山の図表を、なんかコマージュシャルみたいに、これだけのことは知ってるんだぞ、というような形で出してるように思われる方もおられると思いますが、ぼくは講義や講演などで話しをするときに、横途にそれ何をしやべり出すかわからないというようなことがあるので、そういう脱線する危険性が大いにあることを、まえもって防ぐいみで、これだけのことに、本日の講義の内容をとどめて、何とかまとまりのある話しにして行こうというつもりで、こうした沢山の大きな図表を、学部の事務の諸君に非常に御苦労かけて、ゆうべ遅くまでやってもらったのです。そして、ぼくは、これらの図式の出来あがるのを見ずに、さきに帰って、そして、明日は話しをする以上は、その話しの焦点になる結論のところの、それは副題としてある「その残された諸問題の一つ」ということですが、それについての知識を正確にしようと思つて、色々と思ひ巡らしたのですが、どうも正確にすることができなかつた。ぼくは、慢性の低血圧症でもいうのでせうが、朝起きが苦痛で、夜更しは平気なのですが、とにかく

明日は時間にまた合わすように起きなさいかんということ
で、二時に睡眠剤を飲んで床につきました。ぼくの睡眠剤と
いうのは、京大病院から貰っている睡眠剤のほかに、日本酒
の一八〇CCを二、三本注射することになっています。とこ
ろが特別に起きなければならぬと思った時には、逆に寝つ
かれないという悪い癖があつて、昨晩も、いや今朝も、何と
もなく寝つきが悪くて、今朝の五時頃までチビ／＼と飲み直
して、そして漸やく今朝の七時頃から熟睡することができま
した。二度目に寝る時に、十二時に起こしたら大丈夫やと女
房に言つておいたのですが、いつもやかましい女房なんです
が、本日は、さすがと思つてか一時間延ばして、一時に起こ
されて、それから取り急ぎ用意して只今やってきましたというわ
けです。ここへ参りましたのは、二十五分も定刻から遅れて、
皆さんをお待たせさせてしまつたし、申しわけないと思つて
います。

ここに掲げられてある色々の図表は、それらの幾つかのものを
を中心にして毎年、講義をしてきているんで、これらの図
表を一々詳しく説明すると、二、三年にわたる講義内容にな
るだらうと思つます。そいつを、あと一時間少々でお話しす

るといつつもりなので、さきほど申しましたように、ただ脱
線せんような軌道の意味で、ぼく自身のために、掲げてある
にすぎないものというように、お受けとりいただきたいと存
じます。

最終講義ということにつきましては、これは、日本のどこ
の大学においても、当然、やるべきことだと考えられて居
ります。ぼくたち学生のとくに、有名な先生方が最終講義で、
どういふ話しをしたとか、そういう想出は、ぼくたちの年代
の友人仲間では、人さまさまに残っているわけです。しかし
一般的にいつて、最終講義というものには、それぞ
れの性格があるにしても、やはり締めくくりという意味で、
緊張して、なにほどの厳肅さで永年、続けてきた講義を、
いま、ここで終えるという気持が、だれにも恐らく、あつた
はずだというように、ぼくは思つています。それと同時に、
本日のばあい、ぼくのこれからの話しを聞いていただく学生
諸君としても、最後の講義だから、あいつの講義は、おもし
ろくないけれども、ひとつ聞いてやるのが礼儀だという気持
でおられるのでなからうか。とにかく、そういうようなこと
で、一つの大学のセレモニーになつていくといふいみで、そ

これは日本の学界のあるべき姿であるんですが、なさけないことに本学では、ある先生に対しては最終講義をやり、ある先生については、やらないというような、こういう面で立命館大学は、最終講義を必ずやるというルールが確立してない。たまたま今年度は多くの先生がたが、停年退職されるし、すでに他学部では講演とか最終講義とかをやって居るようですし、このような機会に、学校当局としても、最終講義を制度化するというようなことを考えるならば、もう既に、一流とは言いきることはできないにしても、とにかく、まともな大学になっている立命館は、もう一つレベルを高めるといふことになるんじゃないかと、ぼくは思っています。

ところで、ぼくの最後の講義を聞いてやろうと、ここに集っていたいてる学生諸君に申し上げたいことは、ぼくは、これから講演をするのでなくて講義をするつもりでいるということ、いままでの普段の講義と同じような講義のつもりで話しを進めてゆくという気持でいるということなんです。が、しかし、本日のこの最終講義で本大学の生活を終るんだと思うと、やはり何か惜別の情もおさえにくいということもあります。ぼくは、この立命館で、十七年と七カ月おったわけ

で、やはり立命館を去るにあたって、本学には、いいところもあるし、欠点もあるし、こうした裏表をわかっております。それでは、いま立命館についての感想は、どうだということも聞かれると、いわく言い難しで、差しつかえがあるところもある。いい面ばかり並べると、べたほめで、ぼくの性格に合わないし、言いたすと悪口ばかりになるんで、停年退職して五年ぐらいたつと、ああ、やはり立命は良かったという気持になるだろう。そのときに、立命館のことについて随筆ぐらい書いてみようと思っております。きようは最初から、こういうように脱線しているんで、このあたりで、これらの図表にそうて話しを軌道に乗せながら、最終講義なるものを、これから、やっていくことにいたします。

さきほど学部長の御紹介にあつたように、これは学部で特別に時間を作っていたいて、こういう機会を作っていたいて、立命館で、学部で主催するという一つの先例を作っていたいたわけであります。この点を感じると同時に、これだけ多数の学生諸君が、最後の講義だから聞いてやろうという気持で、集まってきたいただいたということは、ぼくとしても非常に嬉しいことと存じております。その嬉しさを込

めて、これからの話しを軌道に乗せて、一時間少々の時間を、おしゃべりさせていただくことにいたします。ひよっとすると放言が、出ると思いますが、ぼくは放談でゆく方が、かえって、話しは流暢になる。だから、その点も、ご了承していただいて、一時間少々のご辛棒を願って御協力してもらえればと存じます。ただいま申しましたように、立命館の経済学部において最終講義をやるということは、おおいに意義がある。およはずながら、ぼくは、貧しい知識を披瀝して、そして、この儀式、大学として当然やるべき儀式を行なうということに対して協力したい。と、ぼくの気持は、そういうところにあるのですが、しかし、これから話す内容は、きわめてつまらん内容になるかも知れません。むしろ放談の方が、かえって役に立つというようなつもりでお聞き願いたい。脱線しないために、これだけの図式や、テキストを、こういうように揃えてきてあるんですが、脱線したら、もうその脱線は、いいかげんにしろ、というようなことを諸君の方から遠慮なしに言ってくれたら、脱線は途中で打ち切って本論にはいるというようなことに致します。

一 方法ということ

そこで本日の講義の標題なんです、それは「資本論における方法と世界観」となっております。マルクスの『資本論』という著書が、どういう内容のものであるかというようになるとは、ここでは詳しい説明は、いらんと思うんですが、一口でいうと、近代社会を、したがって現代における近代主義をも、批判するための理論的な武器ということになる。武器というと、石と角材を連想されるかも知れませんが、現在が闘争の時代であるといっても、現代の学生運動に必要なことは、理論的な武装であって、それには、なりよりも、マルクスの『資本論』を勉強する必要があるのではないだろうか。

この『資本論』のことは後にまわして、ここで「方法」と書いてあるこの「方法」ということは、一般的にいって、どういうことになるのか。ドイツ語ではメトデー Methode で、英語でもフランス語でも同じくメソッド、メトードとなっております。この言葉は、もとは、ギリシャ語の「メタ・ホドス」Meta-hodos という言葉であった。ところで、この後の方の「ホドス」というのは、道という意味なんです。道は、

僕たちが足で歩いて行く。道を通るには、自転車に乗ってもいいし電車でもいいし、金を出してタクシーをとばしても、とにかく通れる道のこと、道の通り方は、現在では、いろいろありますが、ただそれだけの意味のものです。それから次に、前の方の「メタ」Metaというギリシヤ語は、どういう意味の言葉かと申しますと、この言葉について、すぐ連想できる言葉に、古代ギリシヤの哲学者の一人であったアリストテレスの説いた「メタフィジック」(形而上学)というのがありますね。「フィジック」の前に同じ「メタ」というのが付いています。この「フィジック」は、いうまでもなく、ルネサンス以後の近代の物理学のことですが、ギリシヤにおいては、近代に発生、発展した自然科学を、その分化、発展していった特殊な諸部門、天文学、物理学、生物学、その他の特殊な科学諸部門の全体を、総括的に意味していたことになっていて、哲学史の領域では、一般に「自然学」と呼ばれてきております。アリストテレスという哲学者は形而上学者であつたといえますと、現実から離れた抽象的なことばかり言うてる哲学者と思われるかも知れませんが、ところが、そうでなくて、ギリシヤにおけるメタフィジックという名前を

つけたアリストテレスは、まず第一に、経験的な知識を重要視する。古代ギリシヤ人は、自分たちの生活している社会的環境について考える以前に、まず、自然、宇宙に住んでいる自分たちのことを考えて、自然哲学の色々の思想を生み出しておつた。そのなかには唯物論の立場のものもあることは、ご承知のとおりであります。アリストテレスも、唯物論者でなかつたにしても、経験主義的に、その自然的環境についての知識を多方面にわたって整理して一つの学問とした。これが「自然学」なので、だから現代においては自然科学一般が、これに当ることになります。それだけでなくアリストテレスは、社会的環境についての豊富な経験的知識をもち、それについても鋭い分析を加えていったのでした。たとえ『資本論』にも出てくるように、一つの使用価値と違った他の使用価値とが、お互いに交換されるというような事實は、現実にあるけれども、全然違ったものが、なぜ交換されるのか、なぜイコールとして置くことができるのであるか、ということが解決できなかったということを、マルクスはアリストテレスの例を引いて批評している。これは、その商品論のところになら書かれてあります。そういうわけで、現在の物理学

者が、たとえば、自分の専門の学問のずっと祖先を、さかのぼってたどってゆくとすると、アリストテレスにたどりつき、また、たとえば現在の生物学者も、生物学的な思想史を過去にさかのぼると、やはりアリストテレスにたどりつく、という事になってゐる。と同時に、経済、政治、法律についての経験的知識も、現代の社会科学の諸部門の、すくなくとも初歩的な知識も、アリストテレスは十分もっていたといえるのであります。そのような経験的諸知識を整理して「自然学」を作った「あとで」、アリストテレスはメタフィジックを打ちたてたのでした。この「メタ」というのは「そのあとで」ということです。この「メタ・フジック」のばあいでは、人間は、なぜ地球上に生まれたのか、地球上に生まれた以上は、なにをすべきか。人間のこの自然の中に生きている意味いかんということを問うことになり、これがアリストテレスの形而上学となつたわけであります。まあ、こういうことで、ギリシヤ語の「メタ」の意味を理解して貰えば結構なんで、今日は、アリストテレスの講義をするつもりはないんですが、メタフィジックというばあいの、この「メタ」と、メタホドスというばあいの、この「メタ」とは同じなんでですね。

資本論における方法と世界観（上）（梯）

そこで、メタホドスのホドスという言葉の意味は、道なんですからメタホドス、すなわちメトード这件事情は「道のあとで」ということになり、ぼくたちは、眼の前に一つの道がついているならば、その道のあとに添うて歩いて行くことができます。そこで「道のあとで」ということは「道に添うて」ということになります。諸君は立命館の学生である。そして毎日、講義がある。そうすると、諸君の自分の家なり下宿なりから立命館大学へ行く道が、ちゃんとついているので、それで、車に乗ってこようと、てくてく歩いてこようと、かならず「道に添うて」やって来ている。足で歩いて来るばあい、靴をはいて来るのは普通だけれども、下駄をはいて来る諸君もおる。そのやり方は自由自在であるけれども、とにかく「道に添うて」いなければならぬ。メタ・ホドスすなわち「道のあとで」ということは、ぼくたちが毎日やっている、ただの道に「添うて歩く」ということです。これが学問的方法、メトードと呼ばれていることの意味なのです。

大学生としては、大学へ通じて「道に沿うて」毎日歩くという事は、これは大学生としての方法である。にもかかわらず、道は大学にのみ通じてるのではなくて、嵐山にも通

じてるし、だから朝、下宿を出て、立命館の学生でありながら、嵐山へ行ってボートをこいでいる。これも「道に沿うてる」んだけれども、これは学生として勉強するという点からみると正しい方法ではない。せつかく高い授業料を納めておいて、そして大学の教室へ一度も出ず、しかし、このキャンパスに通じている「道に添うて」歩いてきている諸君も、たしかに、いる。自治会活動、クラブ活動、色々なスポーツの練習に、もっぱらエネルギーを費している諸君が、そうでしょう。しかし、これは、大学生活としての方法は、踏んでいるんだけれども、講義を聞くために、大学生としての本質的生活のために、大学へ通じている道を歩いている、ということにはならない。だから、この「道に添うて」歩くということはいつも正しい道の歩き方と誤った道への歩き方があり、このような「道に沿う」ということにおいて、その正しいのと正しくないのとを区別して、そのことを問題にするのが、方法論、メトドロギーなんですね。

いきなり方法論というと、これは、むづかしいということになるんだけれども、要するに正しい一定の目的に向うた、一定の目的のために常にある「道に沿うて歩く」ということ

が、正しい方法だというわけです。ここに出て来られた諸君も、よくみたいな人間の最終講義を聞いてやるとういう目的のために、このキャンパスのこの室へ来てくれたんで、非常に方法論的に正しい人間がここに集まると、こういうことになるわけです。

ところで、方法論というと学問上の方法論のことなので、いま言ったことは、足で歩く道のことなのですが、学問をするということは、頭をつかうのですから、与えられた道を頭で歩くというほかないわけですね。諸君がそれぞれの専門家の先生がたの講義を聞いてると、その講義をまじめに聞いてると、その先生が、どういうように頭を働かして一つの研究成果を出してるか。さらに歴史に残ってる有名な学者、たとえばスミスでも、誰でもよいのですが、スミスの『国富論』なら『国富論』を、一回読んでもわからんが、二回、三回、四回、五回、十回と読んでるうちに、スミスは、こういう方法で学問をやったんだな、ということが解ってくる。そうすると、そのスミス流に、皆さんの頭脳も、慣らされて、スミスの開拓した独自の道に添うて、諸君が各自に自分自身の頭を働かす方法が、おぼえられることとなります。これが、ス

ミスの『国富論』を研究したことになるわけです。今日、これからお話しするマルクスの『資本論』の方法というものも、『資本論』の内容を何回か読んで理解を進めていくうちに、マルクスが頭で歩いた道を、ぼくたちは、そのマルクスの開拓した道に添うて、自分たちの頭で歩いていくということ、『資本論』におけるマルクスの方法論が、どういふものであるのかということが、わかることになります。

ところで、ここで、もう一つ注意しなければならぬことなのですが、ただいま申しました「頭で歩く」ということについてであります。歴史に残ってる古典的な諸文献、それらが経済学の領域にしても、哲学の領域にしても、あるいは政治学や法学の領域にしても、その他等々のあらゆる分野のすぐれた学者たちは、すべて、先人の作ってくれた道を、そのとおりに歩くというんじやなくて、道の無いところに道を切り拓いていた、ということについてであります。そのようにして、はじめて新しい学説が創造できたということがいえるのであります。そこで、ぼくたちとしても、方法論というばあいには、色々な学問上の方法論を、それぞれの頭の使い方を、ただおぼえ、何回でも古典を読んで、その古典を著わし

た著者の頭の使い方、歩き方を習得するというだけのことでは、まだ不十分なのであって、さらに、それらの古典における色々な頭の使い方や材料にして、そして、ぼくたちも、また、道なきところに道を切りひらいて、あとに続く者に自身の開拓した道を歩かすということ、これこそが、生きた学問であって、このような創造的な頭の使い方、はじめて学問を進歩せしめることができるのであります。ところで偉大なる学者といえども、それぞれ切り拓いた道が違ふわけなので、そうすると、現在から見れば、たとえばスミスの切り拓いた道についても、ここは良いけれども、ここが間違っている、というように、ぼくたちは、自分の頭を使い分けせねばならない。マルクスの歩いた道にたいしても、同様に判断して一つ一つ吟味してゆかねばならない。マルクスは、すばらしいから、これは絶対に正しいんだと、単純に決めてかかるのは、ほんとうに学問するのではなくて、ただ信仰していることにすぎない。すくなくともマルクスは前世紀の人間なんので、ぼくたちは、一世紀を隔てた後の世代に生きてマルクス自身の経験しなかつたことを幾つも幾つも経験させられていくわけです。末川総長がしょっちゅう言うてるように、おれ

私たちは今世紀で死ぬけれども、きみたちは次の世紀まで生き残る人間だから、未来を信じろというようなことをね。未来を信じる前に、現実をよく分析するということが必要なんだけれども、生きた学問をするための、生きた方法ということには、そういう現在の現状分析から出発することです。

現在、日本において、世界において、それぞれの学者が、それぞれの方法を打ち出しています。しかし、ぼくたちが、ただ提供されている方法のとおりに従って行くというだけでは、小なりといえども、われわれ研究者は満足すべきではない。こういう学問のやり方、あるいは学問のやり方、それぞれに沢山あるなかで、ぼくたちは、自分自身の独自の道を切り拓いてやろうということになると、やはり当然ながら岐路に立って、こっちの道とあっちの道と、どちらを選ぼうかということになります。これは、ふだんの道を散歩しているときでも、散歩は、まあ運動だから、どっちへ歩いてもかまわんのだけれども、ある方向にいくためには、道が分かれていると、どっちへ行っただ方が正しくて、どっちへ行ったら行き詰まりというようなことを、考えるわけですね。このように選択したり、それよりも、いっそのこと、道がないけれど

も、たとえば草原などを、そのまん中を直線に行って、道も新たに切りひらこうとしたりする。学問するばあいでも、その方法のうえで、岐路に立って眼のまえの二つの道を、どれも選ばないで、同じ方向に向いている、もう一ついい道があるだろうというようなことを考えて、そして新たな道を切り拓いてゆくということは、誰でも、たびたびやっていることなんです。それぞれの文献を読んで、この学者は、こういう頭の働かし方をやっている。別の文献の方は、ああいう働かし方をやっている。しかし、おれには、おれの考え方があるんだと信じて、独自の道を切りひらくためには、両者を批判し、そして自分自身の、貧しいといえども自分なりの独自の道を切りひらくということ、このことが、新しい思想を、あるいは学説を、作り出すということになるわけなんです。

これは研究者のみならず、学生としても言えることで、いろいろの先生がたの講義を聞いていて、そして、ただ試験のときに単位を取るために棒暗記するんじゃないやなくて、講義をまじめに聞いて、そしてこの先生は、こういう頭の使い方をしている、ほかの先生は、こういう頭の使い方をしている、しかし自分としては両方とも完全に満足できない。この先生の

こういう面はいけれども、こういう面はどうも納得できん。

別の先生については、やはり同じように、こういう面が面白けれども、こういう面が悪いと感ずる。それならば、悪い面を両方捨てて、そしていい面だけを採り入れる。採り入れただけじゃ困るんで、さらに自分なりに一つの考え方を打ち出そうと努力する。そこにこそ学問の創造ということが、学生といえどもできるはずなんです。できる可能性にある。可能性にかかわらず、それを現実化しないというのは、要するに、単位さえ取れば四年間で卒業できる。特に立命は甘やかしているんで、卒業前の最終の試験で単位が足りないばあい、一週間のうちに、もういっぺん試験して、そして通してやる。学校側から考えれば、これは卒業さす資格はないんだけれども、すでに就職してるからかわいそうだ。これはど温情のある大学は、ありやしない。ありがたく思わなきゃいかんと思つて、いいものだろうか。それは、とにかくとして、経済学を、ただ今いったように学ぶばあいに、スミス以前にケネーなりトーマス・マンなりが、それぞれ別々の方法を切り拓いている。そして、さらに、スミスの切り拓いた方法をにしたがいながら、リカードは、スミスよりは前進した理

論を、新たに展開しているわけでありませう。

二 世界観ということ

ところで、このように時代が異なるとともに、それぞれ違った経済学説が、つきからつきへと、なぜ出てくるのか。ここで問題にしなければならぬことがあります。それは、世界観の相違ということなんです。これは、言いかえると、立場の違いということなんです。人には、それぞれの個性ないし性格と、それを育ててきた多様な経歴とにもとづく、それぞれの立場があります。ここに数百人の学生諸君がおられる。諸君には、それぞれの立場があつて、そして現在の社会環境についての見方を異にしておるはずですよ。小にしては、現在の立命館をどう思うてるかという立命館大学に対する見方、広くは、現在の世界の動向、そのなかでの日本の現在の社会状況勢に対する見方が、それぞれ違つてもよいはずだし、また、そこに生きる自分自身の人生を、どう見るべきか、というようなことは、諸君一人一人が違った立場で考え得るし、そして、そのようにして、それぞれの人生観なり社会観なりをもつておられる。その自分自身の立場を、それぞれの立場から

の人生観なり社会観なりを、最初は、ぼやっとして、可能性として持ち得るんだが、そいつをはっきりと、おれの立場はこうだと決める、規定することができたときに、世の中にたいする見方も、はっきりと表現して、それを主張するという事になってくる。そして、現代に生きる人間の客観的な世界観というものも、また、それがどうあるべきであるかという事とも、はっきりと、明確に打ちだすことができるようになってくる。現実の歴史の発展過程で、その時代時代に生活している国民大衆のもつ共通の人生観なり社会観が、その時代を支配している世界観ということになるわけで、そして、この支配的世界観が、それぞれの分化した学問の専門領域において、理論化されると、それぞれの時代を表現する代表的な学説が生れるわけです。さきに申し上げたところの、経済学の領域での、それぞれの時代を代表する色々な学説は、重商主義の学説、重農主義の学説、スマス、リカルドの古典経済学の学説などは、近代の初めから移り変ってきた各時代の世界観を表現している傑れた理論である、ということになります。ところで、それぞれの時代の特徴なり個性を表現する学説を生みだした研究者は、すべて、それぞれの時代に普遍

的な、しかも新しい、いや、これから新たに普遍化するべきはずの世界観を、敏感に受けとめて、その世界観を理論化しようと努力したわけなのですが、この努力、自分の予見した世界観を理論的に表現するために、色々苦勞する、そのトライアル・エンド・エラーの積み重ね、これが、さきほど、お話ししてきた方法ということであり、新しい理論を創造するための方法、道なきところに独自の道を開拓するという方法とあるわけです。このばあい、この新理論創造のための方法的な試行錯誤を繰り返さず苦勞というもの、傑れた研究者が、まず最初に直観していた、その時代の、あるいは、きたるべき時代の世界観を、なんとかして理論化しようという目的が、あつたことだといわねばならない。いいかえますと、新たな学説を打ちだしている方法の、その根底には、かならず、予感された世界観が横たわっていると考えねばならない。このことが、本日の講義の標題に書かれてある「方法と世界観」ということの意味なんです。

そこで、近代に発生し、その後発展してきた、重商主義、重農主義、古典経済学という諸学説について、それぞれの方法論があるわけですが、それらの方法論の違いを決定し

たところの各時代の世界観が、どういふものであったか、ということをお話ししなければならぬのですが、講義の標題が「資本論における方法と世界観」といふふうになっているので、いま申しました経済学説史の背景になっている世界観の時代的な移り変りのことについては後回しにして、話しが飛躍することになりますが、ここで、まず『資本論』において、その方法論と世界観とが、どういふように関連しているのか、あるいは、世界観についてのが、マルクスによって、その叙述過程のどの部分で述べられているのか、ということについて、さきはしるようですが、申しておきたいと思ひます。

いままでに、お話ししてきたように、世界観というのは、ぼくたち人間が生活している環境としての客体的な自然ないし社会の全体としての世界を、どのように見るか、ということとありますから、この客体的な世界を、ぼくたちの意識のなかに浮べたところのもの、すなわち、主観的表象であるわけです。すくなくとも最初は、認識主体は、対象としての世界の全体を漠然としか各自の念頭に描いてみるにすぎないはずで、す。しかし、認識のすすむにしたがつて、いや、その最

後においては、漠然とした全体の表象は、概念として把握しなおされることとなります。このように主観的意識のなかに概念として組み込まれたところの、対象的世界についての全体的知識も、いふまでもなく世界観であつて、そして、これこそが、たれにでも同感され承認されうる客観性のある世界観である、といわなければならないはずのものなのです。

それにしても、認識の順序からいって、たれでも最初は、対象的な客体としての世界の全体は、感性的に直観されたものを表象として受けとる、というほかに仕方がない、認識の仕方がないわけです。このような認識の順序のことについては、マルクスも『経済学批判』の「序説」で、そのなかの「経済学の方法」という項目のところで言っております。資本主義社会という対象的世界を環境として生きている人間に、この環境的総体としての世界が現実を意識されるのは、その「全体の一つの混沌たる表象」でしかない、と規定してあることは、皆さんも、よくご承知のはずでしょう。そして、この「全体の混沌たる一表象」というのは、ぼくたちが直接的に感性的に、だれでもが把握されうる現象世界のことなんです。が、この現象世界の背後の本質の領域において、ぼくたちの

分析的な思惟を、どこまでも徹底的にはたらかせて、最後に、現象世界の全体を説明しうるような概念、もつとも単純な概念を抽象して、これを原理として打ち立てる。『資本論』のばあいでは、商品という抽象的概念の原理を定立する。このような現象世界の具体的なものから出発して本質世界において現象世界の全体を説明しうるはずのものとしての最も抽象的概念を描きだすという、そのような頭の働かせ方は、一般に科学という学問において共通しているところの分析的な思惟の仕方、方法なのでありますが、マルクスも、経済学を科学として勉強したかぎりでは、古典経済学までに完成した、このような研究方法を継承して、そして、商品という抽象的概念を原理として、そして、この原理によって資本主義社会の「混沌たる表象」の一つ一つを、つきからつきへと概念化していつて、最後に、資本主義社会の全体を、概念的に把握するようにしたのであるわけですが、このときの抽象的概念から出発して、具体的諸現象の全体を説明してゆくという思惟様式、頭の使い方は、まえの科学的な分析という頭の使い方と、異った論理構造にあることに気づいてもらわなければなりません、これらの異った論理構造にある二つの思惟様

式の双方を一緒にした頭の使い方でもって、マルクスは「表象を概念にまで加工する」といつておるのであります。それにしても、抽象的概念からして全体の一つの表象を概念化するという思惟様式、すなわち総合的に演繹してゆくという頭の使い方よりも、具体的な感性的な現象諸形態を分析していつて、抽象的概念を打ちたてるといつ頭の使い方、すなわち帰納的分析としての科学的な思惟様式の方が、まず先に行わねばなりません。この科学的な分析のための出点、ぼくたちの意識に直接的な対象物でしかありえないし、いいかえると、ぼくたちの日常、経験している事物なり事柄なりであるわけですから、この科学的な分析をすすめるという研究のための「現実的な出发点」であるとマルクスによつても呼ばれているわけなんです。

そこで、標題の「資本論における方法と世界観」といつことなんですが、マルクスとしては、資本主義社会といつても、その発展が、まだ産業資本の段階にとどまっていた時代に生活していたわけであつて、そして、この産業資本主義のもつとも発展していたイギリスの経済社会を、主として研究の対象として自分の眼の前においていた、といふことになつて

おります。そのばあい、どういう方法で、産業資本主義的発展段階の社会全体の経済的構造を掴んでいたか、ということ
は、さきほど、あらまし申しましたような方法論なのですが、
この『資本論』の方法論のことは、あとで更に詳しく説明し
てゆくつもりなので、とりあえず、ここでは、『資本論』に
おける世界観ということに、まず問題をかぎっておいて、こ
の話しをすすめておきたいと思えます。そうしますと、マル
クスは、産業資本主義社会の最高発展段階の経済的構造の全
体を、どういう立場で見ても、それを、どういふように念頭に
思い浮べたか、という問題になります。いいかえると、どの
ように感性的に直観して、そして、この直観した全体を、ど
のように表象したのか、という問題なのです。いうまでもな
くマルクスは、産業資本の段階における賃労働者の立場にた
って、経済学の研究をしたわけでありますから、マルクス自
身の感性的直観は、同時に、それは賃労働者の感性的直観で
もあるわけです。したがって、この発展段階の経済社会全体
が、最初に「全体の一つの混沌とした表象」として受けとめ
られたのは、マルクスの念頭においてだけのことではなくて、
賃労働者の念頭においてのことでもあったとせねばならない。

資本論における方法と世界観（上）（梯）

ただ、これだけのことならば、経済社会全体を「一つの混沌
とした表象」としてしか受けとめられえないということなら
ば、すべての立場の人間にも共通のことで、マルクスなりマ
ルクス主義の立場の経済学者なり賃労働者なりにかぎらず、
どんな立場の経済学者にも、また異った専門領域の研究者に
とつても、また、かならずしも理論的研究に従事していない
一般の人びとにも、同じことである、とせねばなりません。
だから、産業資本の段階の社会全体の「一つの混沌とした表
象」というだけでは、この段階の経済社会を、賃労働者の立
場から見た世界観だということはできない。一研究者にすぎ
なかつたマルクスの世界観が、賃労働者の世界観に一致する
ためにはマルクスとしても、賃労働者が産業資本主義社会の
なかで、どういう位置におかれておるのか、それと資本家階
級との階級関係は、どういう構造にあるのか、ということに
ついて、ある程度の、いや、相当の程度の、しかも、すくな
くとも、その本質的な点にまで突きこんだところの、研究が
行われていなければならない。そうした本質的な経済関係の
研究を相当程度まで進めたのちに、マルクスも、自分の立場
が労働者の立場そのものになりえている、という自覚と自信

とを持つことができる、というわけです。

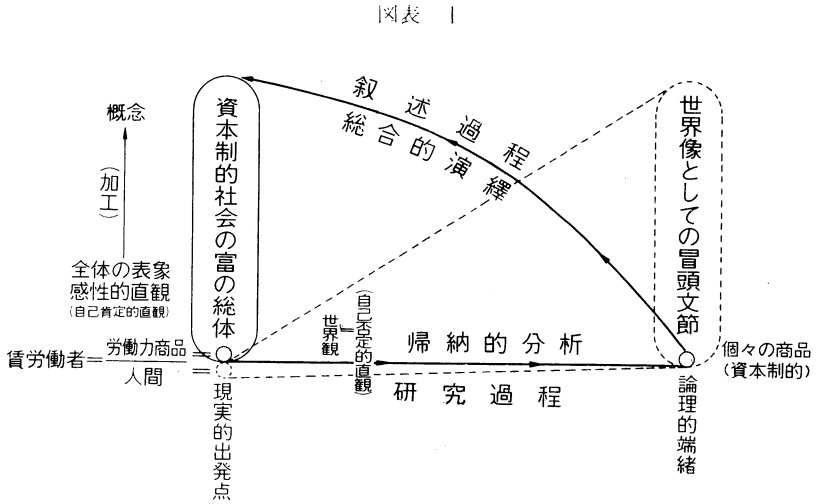
このようにして、マルクスが、自分は賃労働者の階級を代表しうる立場にある、という自覚と自信を持つことになったときには、その感性的直観の内容なるものは、もはや単なる「一つの全体の混沌たる表象」というような漠然としたものではないはずで、すくなくとも、資本主義一般の経済的構造を本質的に認識したのちの、その「全体の一つの表象」でなければならぬ。これが、どういふ内容のものであるか、といいますが、ぼくの意見なのですが、それは、まさしく『資本論』第一巻の第一篇、第一章第一節の冒頭に書きはじめられてある短いパラグラフである。いわゆる有名な冒頭文節である、と思うのです。この冒頭文節では、産業資本の段階における賃労働者の世界観が、述べられている、というのが、ぼくの、ぼく固有の、まえまえからの主張なんです。世界観というのは、さきにも話してきたように、認識主体が自分をとりかこんでいる環境的世界にたいして、これに直接に触れていて、しかも、その本質を直観していることを、いみしています。そして、この認識主体の立場如何によって、その対象的世界の本質を、どのような構造において把むか、が

違ってきます。賃労働者の立場にたつて、マルクスが、自分の環境的世界としての産業資本の段階の経済社会を、感性的に直観したときに、冒頭文節として述べられてあるような内容が、マルクスの頭に表象として直接的に思い浮べられる、ということになっていると、ぼくは主張するのです。いまだ極めて不十分であるが、そこから、やがては資本主義社会の経済的構造の全体が展開されるような萌芽となっている内容、これは本質の領域の事柄で、直接には眼には見えないうのですが、これが、感性的事物の直観において、同時に直接的に把握されているということを、ぼくは、本質的直観とか、さらに実践的直観とか呼んでいるのですが、これらの論理構造については、後で申し上げることになりますが、とにかく、このような、環境的世界のうちにある、その本質的直観のことを、世界観と呼んで差しつかえはないはずで、というよりも、世界観とは、たんなる直観だけのことではなくて、そういった構造のものと考えるべきでしょう。ところで、このような世界観が、認識主体の意識のなかで対象化されたものが、世界像と呼ばれております。とすると、冒頭文節の叙述内容は、この世界像の成文化されたものと考えねば

ならない、ということになります。

そこで、このような、ぼく自身の考えを明瞭にするために図式化してみたものが、図表(一)なんです。ここで、研究のための現実の出発点に賃労働者を位置づけたのは、マルクスが『資本論』という書物を著わしたときに、当然ながら賃労働者の立場にたっていたからのことです。マルクスは、賃労働者に代って賃労働者の立場から見れば、産業資本の段階の経済社会の全体は、どういふものになるか、という観点において、その時代の現実の経済の構造を分析するという研究を、やったのであります。そのばあい、研究の対象としての資本制社会の現象形態を観察するということから始めるほかないことは、さきに話してきたように、たんに科学としての経済学だけのことでなくて、すべての科学的研究に共通のこととて、このことを、マルクスは「現実の出発点」といつたのでした。ところで、賃労働者としては、マルクスが自分たちに代って科学的研究をやってくれたとするならば、自分たちは、そんな頭脳労働をやる能力はないにしても、かりに科学的研究という頭脳労働をやるとすれば、やはり、この「現実の出発点」に自分たちを位置づけて、そうして、資本主義社

会の全体というものを見なければならぬ。そうしたときに、この経済社会の全体が、どういふように、個々の労働者の眼に映るか。このことについて、文章化しようとしたのが、まさしく冒頭文節なのです。資本主義社会のなかで生活している賃労働者は、その環境的社会の全体を、直接的に見る、直観する。そのときに、その全体として世界が、どういふものかというふうに受けとって、各自の頭のなかに想い浮べることができる。この全体の表象が、世界観の内容なのであって、この内容を、賃労働者が各自の頭のなかで、意識的に明瞭なものにする。対象化するときに、世界像が描き出されるというわけです。そして、この個々の労働者の描き出される世界像を、個々の労働者に代って明瞭に文章化したものが、冒頭文節である、ということです。ところで、この冒頭文節です。非常に短い文章なので、誰れにも暗記し得るほどのものです。本日は講義しているのですから、この機会に、諸君とともに、その冒頭の文節が、どんな内容のものであるかというのを、吟味しておきたいと思う。諸君も知ってるだろうと思いますが、この機会に、そのパラグラフで述べられている短い文章を想い出してもらいたい。



ここでは「資本制的な生産様式が支配的に行なわれる諸社会の富」、これを言い替えると「資本家的な富」です。これが、マルクスの研究対象であるわけですが、それと同時に個々の賃労働者にも、直観されている環境的な経済社会の全体の姿でもあるわけです。この資本制的な富は、種々さまざまな形態で現われているが、それらの総体は、結局のところ、「一つの膨大な商品の集成」である、というように、まず述べられております。この「ヴァーレン・ザンムルング」という言葉も、河上先生は集大成、高島さんの訳は集積となっており、その他、いろいろと訳語が違いますが、要するに、色々な商品が、うず高く積み上がっている。と、まず頭に浮かべても差しつかえがないわけですが、資本制的な社会の富、いにかえると資本というのは、種々さまざまな商品からなっている、一つの膨大な商品の集成として現象をする、とマルクスは述べているだけのことなんです。デパートにたくさんの商品がある。そして、それが、われわれの意識に直接的に現われており、たれでもが直観できる。このことは、資本なるものが、われわれの認識するばあいの意識に直接的に現象する姿である、ということであり、したがって、この資本の

現象形態としての商品の集大成を、われわれは直観している、ということをも、まず第一句として述べているのであります。

それだけの意味のものとしては、この第一句の内容は、とくに賃労働者の立場にたたなくても、一般の市民の立場で、たれでもが経験しているところでありませう。

次に、第一句に続く第二句において、それらの「個々の商品は、かかる富の原基形態である」と述べています。この原基形態は、ドイツ語では「エレメンタル・フォルム」なので、要素的形態とも訳されていますし、さらにエンゲルスも言い替えて「細胞形態」とも言っている。細胞形態というばあいは、譬えによって解りやすくしたのですが、人間にしても、その他のすべての動物は、無数の細胞からなっています。だから、生物は、その形が、どのように異っていても、すべて諸細胞の集大成からなっている。それらの一つ一つの細胞の生活活動が、それぞれの生物の生命をささえてるとい

う意味で、生物のエレメンタル・フォルムである、ということが出来る。そういうように論理的に理解すれば、細胞形態といつても、たんなる譬喩ではなくなり、また「原基形態」と訳そうと「要素的形態」と訳そうと差し支えはないわけ

す。そういうような論理構造にあるものとして、諸商品は、資本制的な富を成りたためていっているものとして、いしかえると資本を資本たらしめるものとして、その一つ一つが、われわれの意識に現象している。したがって感覚的に直観できる。だから「われわれの研究」は、それらの「個々の商品の分析をもって始める」というように、マルクスは、冒頭文節で述べているのです。いちばん最初に、資本制社会の富の非常に複雑な姿が、われわれの前に現われているわけですが、それに対する研究の方法としては、資本制社会の富の全体を成り立たしているところの、その要素としての商品が、どういう構造にあるか、そこから研究を始めようというのが、さきに申しましたところの「現実的出发点」であるし、また同時に、それが『資本論』の叙述の出发点、いしかえると、その論理的展開の出发点としての端緒、アンファンクになっているのです。

これを、さきの細胞形態といわれていることに関連させて解釈すると、こういうことになるかと思えます。生物が生きているということとは、いったい、どういうことか。植物にしても動物にしても、人間にしても、チンパンジーにしても、

シラミにしても全部が生物であるが、それぞれ生き方は違う。そんな複雑な生物界の全体を目の前にすると、これを、どういように研究していってよいかに誰しも困るんで、そうなるのと、これは混沌たる全体の表象として、まず最初に受けとるほかに方法はない。そして現実には、そこから出発するんだけれども、表象として受けとめられた生物界の現象形態の一つ一つの生物を分析していって、そして、すべての生物が簡単な細胞から成り立っていることが解って、その次に、この細胞が、生きているということは、どういふことかということ、生物学者は研究したんです。細胞の発見は、十八世紀の後期のことであった。細胞は、核と原形質からなっていて、そして無機物質を摂取して、自分の栄養分とし、そして不必要なものを排泄するということが解った。この生理作用が新陳代謝といわれ、これが、生きてるといふことの構造になっております。そうすると人間も細胞からなってるんで、きみたちも、ぼくなんかも、めしを食って、生きるために必要なものを栄養として残して、そして不必要なものを排泄するわけだね。排泄の分量が、きみたちの分量とぼくの分量と比較すると、これは、すばらしく違うんでね、それは、

きみたちの胃袋が大きいし、ぼくは、もう、そろそろ死にかかっているんで、赤ん坊のごとく、胃袋は収縮している。だから、毎朝、便所へ行って自分の排泄する糞便の小さいのに、なまけなくなる。老いぼれたぼくなどに比べて、きみたちは、実に巨大なやつを排泄しているということは、大いに食って大いに排泄しているということで、それは、生活力が旺盛であることを、いみしている。しかし、これは、肉体的に生活力が旺盛であることに相違ないのだが、しかし、人間は、同時に精神的にも生活力が旺盛でなければならぬ。多方面に読書をやって大いに精神的栄養を吸収して、そして不必要なものも排泄する。忘れてゆくということ、教養ある人間として成長していくんで、身体の方は、使えば使うほど、ぼくのように年を取ると駄目になるのだが、若いうちは、ますます健康になるのと同じように、頭の方も、使えば使うほど、ますます良くなる。ところが知識を栄養として採り入れるという努力は、自発的に勉強するということは、案外、学生諸君には少ないようで、肉体的に生命力は、きわめて旺盛であるけれども、学問的には、はなはな失礼だけれども、新陳代謝が劣っている。その点、ぼくは年とって、肉体的には新陳

代謝が老いぼれて、なまけない状態にあるけれども、知識の方では、なおかつ大いに摂取しようとしている。そして不要なもの片々端から忘れていく。しかし、その知的摂取の方はもう、そろそろ衰えてきました。

お話しは、脱線してしまいましたが軌道にのせて、冒頭文節の内容の吟味に切りかえることにいたします。この短いパラグラフは、ただいま申しましたように、三つの文章で三段論法的に展開されております。第一句としての文章は、それが一つの文章であるかぎりでは、一つの判断の構造をもっている。その述語にあたる「一つの諸商品の集成として現われる」という部分だけを、とりだして見れば、これは、まさに「一つの全体の混沌たる表象」であります。しかし、これが「現われる」という繫辭で結ばれている判断的構造にあるかぎり、いいかえると、主語としての「資本制富」と等置されているという関係自体は、直観の対象ではない。眼に直接の見える事柄ではありません。この事柄は、すでに判断されたものとして、考えられた、思惟された、したがって、そう判断しうるまで研究された結果において、打ちだされた命題と考えねばならない、ということに注意せねばなりません。

資本論における方法と世界観(上)(梯)

それから、第二句としての文章の判断的形式は、もっと重要な論理の意味を持っていること、このことに特に注意を、諸君に促しておきたい。さきほど説明したところでは、その「要素的形態」を「細胞形態」というように理解しても、エレンメンタルという學術語の論理的な意味を忘れさえしなければ、差し支えはない、と申して参りましたが、そのつもりで、生物と細胞との関係のことで、お話しを進めてきて、ぼく自身の説明も、いつのまにか、一つの譬喩的なものになっってしまったようです。そのために、第三句としての「だから、われわれの研究は、商品の分析をもって始まる」という命題、この命題の文章についての説明は、不十分なものになっている。いや誤っていることになる。ことに、ぼくは、いま気づいているのです。皆さんは、どう思って聞かれたでしょうか。この第三の命題の文章のなかの「われわれの研究」といったばあいの、その「われわれ」というのが、生物界や細胞の構造を、研究する生物学者と同じように、諸君は受けとられたのではないかと推定するのですが、どうでしょうか。冒頭文節の話しに入るときの最初に、ぼくは、これは、この冒頭文節は、賃労働者の世界観が、その対象化としての世界像

が、成文化されたものだ、と言ってきたはずでした。そのかぎりでは、この「われわれ」というのは、賃労働者としての「われわれ」でなければならぬ。マルクスが『資本論』を賃労働者の立場にたつて書いたかぎり、マルクスとしても、同じく、賃労働者の立場にたつて自分のこの本、——『資本論』——を読んでくれる読者を、そこに想定していたはずである。といたしますと、この「われわれ」というのは、マルクスおよびマルクス主義者としての「われわれ」ということでなければならぬことになります。ところで、さきほどまでの説明のように、この「われわれ」という言葉の意味を、生物界なり細胞の構造を研究するときの「われわれ」というように、ただ科学者としての生物学者の立場のものにしてしまふのでは、そこに、賃労働者の立場ということは消えてしまっていることとなります。もし生物学者と同じように、たんなる科学者の立場、あるいは科学を研究しようとする立場だけのものならば、マルクスの『資本論』を経済学として研究するばあいでも、かならずしも賃労働者の立場にたたなくとも、よいということになる。資本家の立場にたつていても、マルクスの『資本論』を、ほんとうに理解しうる、ということ

となりません。もちろん、そういうように、逆に、超階級的に読むことこそが、マルクスの『資本論』を科学として厳密に扱うことになるのだ、と主張するマルクス研究者が現におられることは確かなことです。この点については、諸君も、よく知っておられるはずでしょう。しかし、ぼくとしては、このような考え方に、最初から反対しているのです。

それでは、どういうように冒頭文節を、それを構成している三段論法的な叙述を、解釈したらよいか。このことについては、本日の講義で、順を追って、お話ししてゆくことに致したいと思つてるところなんです。とにかく、この講義の初めですから、独断のようですが、冒頭文節の賃労働者の世界観が述べられたもの、というように前提して、話しを進めさせていただきます。というのも無理かと思つますから、まゝもって一言だけ、さきばしつて暗示的に申しておきますならば、第二句の判断形式は、第一句の判断形式とは、主語と述語とが逆になつたものとして、理解すべきだということですから。第二の命題は、その意味からして「要素的形態としての個々の商品が、資本家的な富を、成り立たしめている」といふように、理解されるということですから。そして、賃労働者は、

現実に、資本家的富のなかに労働力商品として実在している
のであって、しかも賃労働者は、人間としては、自分自身の
この商品的な実在性を否定しなければならぬ論理構造にあ
るわけです。このような意味のものとして、この図表(一)
を書いておきました。そうすると、賃労働者は、資本主義社
会のなかに生活しているときに、資本家的富という全体の像
を自己否定的に描きだすほかないわけで、これがマルクスに
よって冒頭文節として、賃労働者の世界観の対象化されたも
のとして、叙述されているということになります。そのかぎ
りで、第三句の文章にある「われわれ」ということも、いま
申して参ったように、賃労働者としての「われわれ」、ある
いは、賃労働者の立場にたったかぎりの「われわれ」という
ことになるほかないわけです。

しかし、これらの詳しい説明は、これからのことにしてお
いて、つぎに、一般に『資本論』が、科学であるとされてい
ることについての理解を、深めてゆくことにしたいと思いま
す。ここに掲げている図表(一)について言えば、直線で示
してある研究過程の部分に重点を置いて、科学としての経済
学的方法論的体系というものを理解することになります。つ

いでに、叙述過程としてあるところの総合的演繹という思惟
様式の進展が、半円のつもりの曲線が示されておりますが、
これは、ヘーゲルの哲学体系をマルクスが批判的に継承した
ことに由来するものであって、この図式としては、冒頭の文
節において、マルクスが、まず最初に、仮定として定立して
おいたところの、賃労働者の世界像が、順次に、たんなる仮
定でなくて、真理であることを論証してゆく過程だ、とい
うように取りあえず考えておいて貰えるならば結構です。

三 近代経験科学の体系化

さて『資本論』の学問的体系としては、ただいま申しまし
たように、ヘーゲル哲学の体系を唯物論化した面と、それか
ら、もう一つ、古典経済学にまで発展してきた経済科学を弁
証法的に止揚した面とが、これらの二つの面が統一されて成
り立っているのです。近代になって始めて成立した社会諸科
学は、経済学だけでなく、それより先に成立した法学、政治
学などは、すべて、それらが経験科学であるための原型を、
やはり近代になって始めて成立した自然科学に求めています。
そのいみで、近代に成立して発展してきたところの、法学、

政治学、および経済学の科学としての方法的体系が、どういふものであるか、ということを理解するためには、それらの社会諸科学より先きに成立したところの、経験的な学問としての自然科学の方法的な体系が、どういふものであったのか、ということ、さきに理解しておく必要がある。

ところで、一般に科学という学問は、ただ今も申したとおり、ルネサンス以後に始めて成立したものであつて、近代以前には、なかつたのであります。古代ギリシヤにおいては、学問というと、「テオリア」*theoria*、ただ観想したことによつて得た理論のことであつた。それでも、さきほど申しましたアリストテレスは、近代の科学の祖と呼ばれるほどで、自然現象だけでなく社会現象を観察した上で、或る程度の分析を加えておりますが、一般的にいって、ギリシヤの哲学者は、事物を観察しても、それだけで直ぐに、その存在の意義を考へることに重点をおいているというのが、特徴になってゐます。現代の哲学の領域で存在論というのが、そのまま、このようなギリシヤの学問一般に当てはまるわけです。とにかく、そのような観想的な生活が、古代ギリシヤでは理想とされてゐて、たとえば、プラトンの国家論では、政治を担当す

るのに最も適したものは、哲学者だということになってゐます。政治をするのは、「テオリア」だけでは不十分で実際に行動せねばならないにしても、古代ギリシヤでは、この実践「プラクシス」*Praxis*、ということは、「テオリア」に従属したものと考へられてゐました。それから物を作るといふこと、「ポイエシス」*Poiesis*、ということ、奴隷のやるべきことであつて、自由市民のやるべきことと、されてゐたのです。ところで、近代に成立した科学と呼ばれてゐる学問では、それが最初に成立したのが、自然を対象にした自然科学でありますが、この自然科学において最も大切なものは実験といふことでせう。ただの理論は仮説にとどまつて未だ真理とは言えない。この仮説が真理になるためには、新たな事実によつて検証されなければならない。この検証のためには、そのために必要な道具を作るといふこと、奴隷のやるべきことだと軽蔑せられた「ポイエシス」といふことが、科学といふ「テオリア」に従事する学者にとつて、もつとも重要なことになってきたわけです。さらに仮説を打ち出すためには、諸現象を十分に観察せねばならず、この観察にも、たとえば望遠鏡を作るといふ技術が要るわけです。そして、

このように観察し分析してゆくことや、検証するということは、自然科学を、ケプラー、ガリレーからニュートンにいたるまで発展させたところの近代の自然科学者たちの研究上の実践、すなわち「プラクシス」でもあったわけですから。このような古代ギリシヤにおいて、「テオリア」から分離して考えられていた「プラクシス」なり「ポイエシス」なりは、ルネサンス以後に成立した近代自然科学という経験主義的な立場の学問では、その理論、「テオリア」と切り離しえないものとして、結合されたものになっているのです。これが近代の学問を特徴づけるモメントになっているので、このような実験的精神は、むしろ近代社会そのものを成立させたとも、いうべきものなんです。

いまも申しましたように、まず眼の前にある事物を観察して異同を区別し、共通点を抽象して行くことを分析といいますが、そして、この分析は、機械や薬品を用いてやりますが、この用いる主体は、いうまでもなく自然科学者であり、研究者の頭脳であります。観察は、事物の現象についてでありませんが、頭を働かして分析してゆくことは、眼の前に現われている事物の本質が何であり、どういった構造にあるか

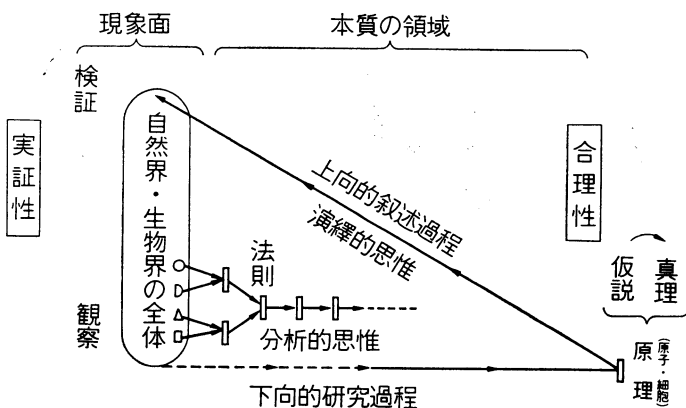
ら、そのように現象してくるようになったのか、というように因果関係をたどって考えてゆくことであります。このような分析的思惟によって、異なった形態で現象している色々な事物のあいだの本質的な共通性を法則として定立し、さらに異なった法則と法則との同一性を抽象して、より普遍的な法則とし、このように諸法則の奥に、次から次へと、いつそう普遍的な法則を発見してゆくという無限進行は、最後の統一的な法則を原理として打ち立てるまで、やめることはない。ところで、このように本質の領域において原理として打ち立てたとしても、これによって、はたして研究対象として領域の現象諸形態の全体が、説明できるか、いまだ説明し得るかどうかわ解らない限りにおいては、この原理は仮説にとどまっているわけです。この仮説が正しいか正しくないかを、ためすために、今度は、マルクスのいわゆる「後方への旅」としての、原理から最初の現実の研究の出発点であった現象の世界にまで、演繹的な思惟を、働かしてゆかねばなりません。これが検証ということです。このばあいに、観察から出発して分析的思惟を徹底さすという下向的研究過程と、逆の後方への上向的な演繹的思惟とが、本質の領域における近代科学の

科学としての体系を構成するのであります。

ところで、ここで、この自然科学の体系化を促進するため
に大きな役割を果した二人の自然哲学者を、諸君は思い出し
ておかねばならないでしょう。それは、たゞいま下向的研究
過程とされたところの、観察からの帰納的分析によってのみ
新知識が得られると主張したイギリスの経験論者としてのベ
ーコンの『新機関』という仕事であります。もう一つは、反
対に觀念論の立場で、もっとも確実な「先有觀念」から一切
の宇宙を演繹したところの、フランスのデカルトの『方法叙
説』という仕事であります。これらの二人の哲学者の仕事が
総合されて、近代自然科学の体系が、さきほどまで申したよ
うに出来あがったのであります。それにしても、近代自然科
学の、その近代性なるものを特徴づけるものは、経験的知識
の体系でありますから、現実の出発点なり検証なりのばあい
の、現象の領域においての観察としての操作が、重要視され
ねばなりません。そして、これが、自然科学のばあいには、
実験ということになるわけですね。

自然科学の領域で、この実験という新しい方法を、最初に
試みた人は、ガリレオ・ガリレイだということになっており

図表 II



ます。ピサの斜塔の頂上から錘りを落して、物体の落下についての精密な計算を、やったという伝説が残っております。

この伝説が、はたして事実であったか、どうかは、今日では疑問視されているようではありますが、しかし、物体の落下運動について、新しい法則を発見したということは、事実なんです。ガリレーは、最初には、落下の速度は、物体の通過する距離に比例して増加する、という仮説を考えていました。しかし後には、この仮説を棄てることになった。と申しますのは、その後、振子の運動と、叙面をすべる物体の運動とを、あわせ考えて、落下運動についての色々な実験を試みたのでありますが、その結果、速度というものは、落下を続けている時間に正比例する、という数学的な解釈に成功したのであります。それから、大砲から打ちだされた弾丸が、しばらくの時間は、その打ち出されたハズミのために下に落ちるはずの自然的な性質を破っているわけですが、この弾丸の激しい上昇と、その自然的な落下との関係について、十六世紀の後半頃までは、そこに円運動が描かれている、という仮説がたてられていたのであります。しかし、その仮説には、数学的な裏づけが、されていないまままで受けつがれてきたの

(資本論における方法と世界観(上)(梯))

です。それにはたいしてガリレーは、この空中での砲弾の運動は、空気のないばあには、放物線の軌道を描くのでないかとして、それを説明するために、微分という高度の数学を適用した、とされています。数学は、ルネサンスとともに、著しく進歩しておったのであって、古代ギリシャの幾何学の伝統のほかに、数値の計算をするために代数的方法が新たに用いられ、小数とか対数とかの導入によって、大きな数を使う計算を簡単なものに縮めることが、できるようになっていたのであります。

ガリレー以前の有名な自然科学者は、コペルニクスにしてもケプラーにしても、天文学者であった。コペルニクスの地動説も、太陽の周りを地球が自転しながら円軌道を描いて運動する、という仮説を立てることのできたのも、その精密な観察を数値的に吟味することのできる数学的方法の発達していたことのおかげであつたわけでありました。天文学が、近代の始めにおいて、なぜ最初に成立し発展することになったか、ということについては、コロンブスの新世界の発見によつて、地球の円いという仮説が検証されるにいたつた、という学問的な意味のほかに、その頃の探險的な航海者たちによ

八九 (八九)

って、貿易の範囲が著しく拡大したという経済的な条件も、あわせて考えねばならないことは、いうまでもありません。古い占星術にたよっていた遠洋航海は、新しく書き改められた地図のほかに、記述的な天文学の新知識が、ぜひ必要なものになってきたわけでんです。この天文学は、十七世紀に入ってケプラーによって、もう一つ、進展することになります。コペルニクスにおいてさえ、まだピタゴラスⅡプラトン流に、天体は完全な運動をしているはずであるという観念に囚われていて、それを円運動と考えていたのですが、ケプラーは、惑星の運動を円軌道に乗っているとすると、新しい観測における精密な数学的な計算と合わない点が、色々出てくるので、多くの失敗をかきねた後に、火星の運動を観測することになったときに、その運動が、太陽を焦点とする楕円軌道である、という結論を打ち出すことになりました。しかし、このケプラーの楕円軌道説も、数学的計算によって裏づけられただけの、一つの仮説にとどまっていたことは、コペルニクスの地道説と変わりありません。これらの仮説は、数学に達者な専門家には、十分に理解されることのできて、一般の人びとには、すぐには解らない、むしろ、ど

うでも良いことだ、ということになります。たとえば、地球が自転しているということが、天文学的には精確に計算されていたとしても、それでは、なぜ、強い風が自転によって起らないのか、また、投げ上げた物体の落下を、なぜ、自転の反対の方向に偏らすということが起らないのか、要するに地球の運動は、一般の人がその肌感じられないのは、どうしてか、というような常識的な質問が、学者の間にも、反対意見として、多く出されていた、というのが、事実であったわけでありませう。

そこで、コペルニクスの思想を一般の人びとに信じさせるために、啓蒙運動が当然に起ってくるわけで、その一人の代表者としてのジョルダン・ブルーノは、ローマ・カトリックの権力のもとに、焼き殺されるといふことさえ起っています。こうして啓蒙運動は、多くのコペルニクス主義の立場に立つ学者を、輩出させた功績はあるのですが、この啓蒙運動を最後に成功させるにいたったものは、ガリレオの新らしく開拓した研究であったわけです。天文学者が、その専門領域で数学的計算からの仮説を信じて疑わない、というアカデミックな態度だけでは、一般の人びとの関心を惹きつけるのに

不十分であるとする、専門の天文学者も、常識の世界に下りていって、その常識的な疑問を解消してやる、という仕事をすると、そういう別の学問的な仕事をする必要がある、というのであったのです。いいかえると、天文学上の計算も、専門的立場にとどまって、より精密なものに進めていくことだけに頭を使うのでなくて、そのほかに、すべての人びとの利用できそうな、直接の物理的な方法でもって、天体を地上に引きずりおろして、太陽なり月なり金星なりを、たれにでも眼に見るようにしてやる、ということが必要だったのです。すなわち、それは、望遠鏡を發明するということであつたのです。そして、このことを成しとげた人が、ガリレオ・ガリレイであつた、ということになります。

ガリレイが望遠鏡を始めて作つたということについては、一つのエピソードが伝わっております。オランダの或る眼鏡製造業者の子供たちが、遊び半分に、窓にあつたレンズに、もう一枚のレンズを重ねて見たときに、外の物が近くにあるように見える、というので楽しんでた、ということですが、この話しを伝え聞いたガリレイは、オランダまで飛んでいって、その重ねレンズを検べた。そして工夫に工夫を重ねて、

資本論における方法と世界観（上）（続）

とうとう望遠鏡を發明することができたと、というエピソードなんです。このエピソードの背景には、光学機械の製造業の發達ということを、当然ながら想いだしておかねばなりません。とにかく、自分で作つた望遠鏡を、ガリレイは天体に向けて、觀察を数日のあいだ毎晩やってみた。そうすると、月は完全な球であるどころか、海と山とに蓋われていること、金星は、月と似た姿をしており、土星は、三つに分れている、ということなどが解つた。さらに重要なことは、木星の周りに三つの星が、地球の周りを回っている月と同じように、回っていることが、觀察されたのであります。これらの觀察の成果の全部を總合して、コペルニクス体系の解説をしたわけです。ガリレイは、それだけでなく、このようにして得られた新知識を世間に広めようとして一冊の本——『星から使者』——にして出版したところ、非常に評判となつて、当時の科学書のなかでのベスト・セラーになつた、という事です。このような新らしい別の仕事、物理学と天文学とのそれぞれの限界を、とりはずしたというガリレイの仕事によつて、はじめて、専門的な天文学者の数学的計算による色々な新らしい假説も、一般の大衆に信じられるようになった

たわけであります。そして同時に、古代のアリストテレス的な宇宙観は、そろそろ棄て去らねばならない、という常識を、一般に拡げてゆくことになったわけであります。

物理学者であったガリレオは、このようにして、地球上における物体の運動を問題にする動力学の法則を、天体の色々な運動にまで演繹して、物理学と天文学とのあいだの橋わたしをすることになった。それらの中間領域を学問的に開拓することができた、というわけです。なぜなら、運動と、地球を回る月の運動とを、同一のものとして把むことができないか、ということを考えて、そこに微分法を適用して、そしてこのことに成功したからなのであります。その後半世紀を経て、ニュートンが万有引力の学説を打ちたてるための前提条件が、ここに据えられたというわけです。この万有引力の学説は、ケプラーの観測した楕円軌道の法則と、ガリレイの動力学とが、結合されて出来あがった、とされていますが、そのためには、なお磁気学の成立が、必要だったとされています。普通に力といえますと、接触した物体どうしが互ひに斥けあう、というように考えられていたのが、遠くに離れている色々な惑星と恒星としての太陽、衛星としての月と惑星と

しての地球との関係では、惑星なり衛星が、それぞれの一定の軌道を保っているのは、磁気による引力の作用によるのだ、という物理学的な考えが、必要なものになるからなのです。

このようにして、太陽系の秩序は、物理学的に妥当な、いささかも神秘的でない説明が、与えられることになったのですが、このニュートン物理学が成り立つ基礎には、ガリレイの仕事が前提となって横わっています。しかも、ガリレイの時代では、天体の秩序についての物理学的な説明は、スコラ哲学者たちによって、キリスト教的に妥協させられていたアリストテレスの宇宙観を、根底から打ち破れるものとして、カトリック教会だけでなく、科学者のなかにも、多くの敵を作ることになり、ローマ法王庁から宗教裁判にかけられることになったのであります。

以上のところで、ガリレイの仕事を中心として、近代の自然科学の、その理論内容について、ぼく自身の専門外の知識を、申し述べてきたのですが、それというのも、ガリレイの物理学および天文学での業績は、近代自然科学という学問の特徴を、典型的に發揮していたからであります。まず第一に、ガリレイが自分自身で望遠鏡を作った、ということなん

です。このことは、ガリレイがすぐれた研究者として、あたらしい理論をクリエートしたというだけでなく、彼は同時に、光学機械をいぢくることのできる技術を身につけていた、ということを意味しているわけです。古代のギリシヤ時代にあつては、学者は、ただ理性をはたらかして理論Ⅱ「テオリア」を編みだすべきものだ、と決められていたのにならして、ガリレイは、観察および検証するために、そのために必要な道具を「作る」、すなわち古代ギリシヤでは奴隷のすることだとされた「ポイエシス」を、やっているということですが、

現代になってからは、技術家と理論家が、自然科学の領域で二つに分かれて専門化していますが、ルネサンスのときには、まず最初には、芸術家が手を使って、絵を描いたり彫刻したりするときに、当然のことですが、そのために必要な道具を作ったり、そのために必要な材料についての知識を充分に、もつておらねばならなかつたわけです。それだけでなく、たとえばレオナルド・ダヴィンチは、大学を出た人間でないのですが、これまた典型的に示されていることですが、人物の彫刻をするばあいには、外面的な衣装や顔つきを眼に見えるままに眺めたのでなくて、解剖学を研究して、骨格の構造や筋

肉の緊張の具合を十分に知っていたのです。そして絵を描くばあいに遠近法の原理を心得ていたのであります。さらに、もう一つ付け加えておきますと、空を飛ぶ鳥を観察して、自分で飛行機を作つたということさえ伝えられております。人類史における始めてのこの飛行機は、じつさいに飛ばなかつたのですが、とにかく、理論と技術とを結びつける仕事としては、近代の特徴を先駆的に発揮したものといえます。このようなルネサンスの芸術家の動きを受けついで、十六・七世紀の自然科学も、やがては、すぐれた理論家は同時に技術者でなきゃならないことになつたのです。ギリシヤにおいては、そういう技術Ⅱ「ポイエシス」とか政治的な実践Ⅱ「プラクシス」などは、学問すなわち「テオリア」とは無縁のものであつた。それにならして、近代の経験主義的な学問として成立した自然科学では、このギリシヤで、学者でなすべきでないと言はれた工作あるいは実践ということが、学問の本質的な不可欠な契機に転化してきているのであります。

ここで、ただいま申しました実践ということには、二つの意味がある、ということに皆さんの注意を促しておきたいと思ひます。さきのガリレイのばあいに、望遠鏡を自分で作つ

て、そして、これでもって天体を観察し、みるということ
は、コペルニクス体系についての詳細な解説をするために、
ぜひとも成しとげねばならない、という真理追求のための欲
望の実践的意志の現われとして、それ自体で、理論内の一つ
の「ブラクシス」なのであります。また、地上での、物体の
落下のばあいの加速度なり、砲弾の拋物線の運動なりについ
ての数学的計算を、月の軌道に演繹するという、開拓的な仕
事を実際にやりとげたことも、この検証作業や、そこにおけ
る実験ということが、そもそも、新理論をクリエートするた
めに不可欠な「ブラクシス」であるのであります。それと同
時に、このような科学的な仕事をやり、さらに、これを大衆
の知識にするために本を出すということは、当時のローマ・
カトリックの宗教的権威にたいして、あえて反抗しようとい
う決意が、不可欠のことであつたとせねばならない。どんな
政治的な弾圧が他日は自分の身にも及んでくるかも知れない
にしても、それから避けるのではなくて、その覚悟のうえで、
科学的な新理論を世間に発表するということは、真理のため
であるにしても勇氣のあることなので、これは、同時に、政
治的な実践ということになります。このような啓蒙運動が政

治的に弾圧された例としては、ガリレイのまえに、ブルーノ
が殺されており、カンパネラが長い年月にわたって投獄され
ており、その他、近代初期のコペルニクス主義者としての自
然哲学者なり、社会思想家なりが、同じような運命に見舞わ
れていることについては、諸君は、知っているはずです。こ
のような政治的な弾圧は科学理論にとって、偶然的に、外か
ら見舞われるようにも解釈されるでしょうが、その時代の支
配的な公衆道徳なり宗教的信念なりに矛盾するような、破壊
的な理論なり思想なりを公表することは、真実を訴えること
によって、身に振りかかるであろう運命を、最初から覚悟し
て、勇氣ある決意のもとに遂行されたものと考えねばならな
い。このように見てきますと、近代初期の自然科学の成立の
過程にあつては、観察あるいは検証における実験という「ブ
ラクシス」は、同時に政治的な「ブラクシス」と結びついて
いた、というように考えねばならぬのであります。そういう
点から、二つの意味をもった実践ということが、すくなくと
も、近代の初期においては、自然科学だけでなく、社会科学
の領域でも、それらの理論と本質的に結びついたものであつ
た、ということに諸君の注意を促しておきたいと、ぼくは思

っているのです。

さて、話しが前後いたしました、新理論を創造するため
の「ポインクス」なり「ブラクシス」を、あえてやるという
こと、この実験的精神を、学者から学者へと継承して徹底せ
しめてゆくという多くの努力の積み重ねによって、いいかえ
ますと、ガリレーからニュートンにいたるまでの、自然界全
体についての研究の歴史的発展の過程において、自然科学は、
この(Ⅱ)の図式のように体系化されたわけでありませぬ。

このような自然科学の方法論が体系化されたのは、自然の
領域でも、まず最初に、単純で基礎的な領域から着手されて
います。ニュートン物理学が示しているように、地上の力学
的關係から天体間の關係にまで拡大されたにとどまっていま
す。自然界にあつても、無機物質の世界よりも、さらに複雑
な構造にあるのが、有機界、すなわち、生物の世界でありま
す。化学、医学などの諸研究の成果のうえで、生物学が、図
式(Ⅱ)のように体系化されはじめるのは、十八世紀に入っ
てからのことで、その上向的叙述の典型となるダーウィンの
労作が出るのも、十九世紀においてであつた。それにしても、
有機の世界を研究するばあいの方法論的体系は、無機の世界

の研究の段階で成立した方法論的体系と、同一であることに

問題は、ありません。というのも、要するに、物理学にして
も、生物学にしても、ともに経験科学という点では、変りは
ないからです。そういう意味で、これらの二つの種類の科学
の方法論的体系を、同一のものとして、ここに書いておいた
わけなんです。要するに、いかなる領域を研究の対象とした
色々の科学であつても、自然科学者としては、まず、現象を
観察し、そこから本質の共通性を法則として抽象して打ち出
し、これが、もとの現象世界の他の事実なり新たな事実によ
つて検証されなければ、たんなる合理的な仮説であるにとど
まっています。そのかぎりでは、この定立された合理的な法則
から演繹的思惟を働かせねばならない。こういうような、観
察↓分析↓法則という下向的研究と、法則↓演繹↓検証とい
う上向的論証との、二つの過程を、その循環的過程を、繰り
かえし繰りかえし試みて、研究対象の現象界の背後の本質の
領域を、奥へ奥へと入つてゆく無限進行の操作こそが、自然
科学者とよばれているところの、すべての研究者が、日頃、
やってきたことなんです。その最後の結果において、その研
究対象の全体を説明しうるような原理を真理として打ちだた

ることが、ひとまず出来たときに、その特殊な自然科学は、方法的に体系化されたということになります。この方法的体系において、観察、検証の操作における実験こそが、自然科学の実証性とよばれる面で、分析し、演繹する本質の領域で思惟作用が、その合理性とよばれる面であって、これら二つの面を、不可欠の契機として、自然科学的方法論的体系なるものが、なりたっていることになっています。そして、このような自然科学の領域で、まず初めて打ちたてられた方法的体系が、社会の領域に適用されるようになったときに、社会科学的方法論も体系化される、ということになります。

四 近代科学としての経済学における体系化

ところが『資本論』が経済学という一つの社会科学であるかぎりでは、一つの経験科学であるかぎりでは、その方法的な体系も、自然科学のただいま申しましたのと同じような方法的体系を、持っていなければならぬことになる。このことは、近代の経験科学としての経済学が、どのように発展してきたか、ということ、さかのぼって見てゆけば、よく

解ると思えます。近代の自然科学的方法論と、その体系化とが、社会現象の研究の領域に適用されるにいたるのは、十七世紀のイギリスにおいてのことでありました。これは、社会現象一般についての研究というのではなく、特殊な社会現象としての法律の世界、ないしは政治の世界の研究領域に、近代自然科学的方法論が、そのまま適用されて、ホッブス、ロックの自然法学の体系が、まず最初に、社会科学的方法論的体系として成立しております。そして、ロックからスミスへと、自然法の思想が経済現象における自然秩序の思想へと、移行し転換していった、経済学的方法論的体系が成立する、ということになっています。しかし、この講義では、特殊社会科学としての自然法学のこと、それからの他の特殊な社会科学としての経済学への移行のことは、省略することに致しまして、スミスの『国富論』における方法的体系が、どういような構造になっているかと、いうことに話を進めたいと存じます。そして、それまでの経済学のおもな学説の方法的論が、スミスの経済科学としての体系のなかに、それぞれ位置づけるとするならば、どうなるかということについて、お話ししてみたいと思います。このことをお話しするにあ

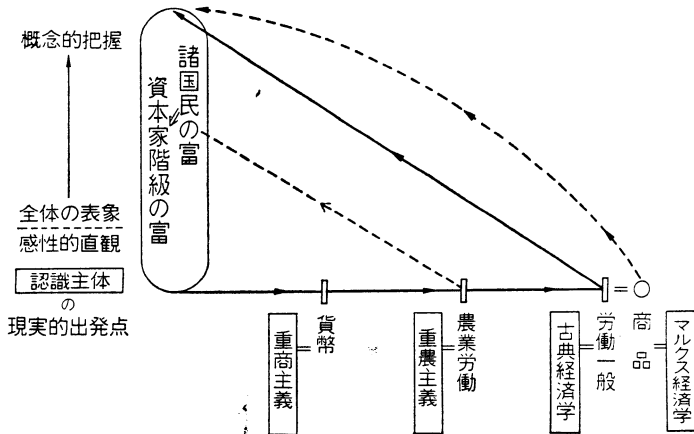
たつて、時間を節約するいみで、図式化してみたのが、これ
 —— 図表(Ⅲ) —— なんです。

そこで、近代に成立しはじめ、そして、スミス、リカルド
 によって体系化されるまでに発展してきたところの、科学と
 しての経済学の内容を、その発展の順序にしたがって、ここ
 で、お話ししなければならぬことになるわけですが、この
 ことについての正確な、より詳しい知識は、すでに皆さんは、
 経済学説史の知識として、「学説史」専門の先生なり、その
 他の諸先生がたの講義によって、お持ちのはずなので、わた
 しの本日の講義では、これを省略させていただきます。とい
 うよりも実のところ、わたし自身も、この学説史についての
 詳しい、しかも確かな知識なるものを、持っているわけでは
 ないのです。ただ、わたしとしては、マルクスが『経済学批
 判』で言っている言葉を、そのまま図式化してみただけのも
 のが、これ(Ⅰ図表のⅢ)なんです。そこで、そういった図
 式の説明を、簡単に申し上げることにいたしました。

まず重商主義についてなんですが、これは、絶対主義の段
 階の経済学であつて、国内に財宝を積み上げるということを
 目的とした経済政策として出発していました。そのときには

資本論における方法と世界観(上)(梯)

図表 Ⅲ



各国は、軍事的な背景に支えられながら貿易をやっていた。そして、他国よりは自国内に、より多くの財宝、要するに貨幣を積み上げようと、お互いに競争した。これが当時の各国の経済を支配した思想であり、世界観であった。このような世界観の持主は、絶対主義的な国家権力を直接に支持していた貴族、大地主、僧侶と、それに結びついた巨大な前近代的な貿易独占資本家たちであったことは、いうまでもない。だから、そういう世界観のもとで、国富は貨幣から成り立つてるといふ理論が出てくることになる。ところが、貨幣というのは、一つの生産物と生産物を交換する手段にすぎない。そのかぎりでは、この理論内容は、国富の原因を流通過程に求めたものであって、ただ、それだけのものとして、このような経済政策論から出発した重商主義も、やはり分析的な研究的思惟を働かせていた、ということではできません。

ところで、それについて、国富の原因を、ただ流通過程だけに求めようとする、この重商主義の理論にたいする批判的立場として、つぎに出てくるのが、重農主義の経済学などで、その代表者であるフランスのケネーは、フランス革命が起る以前において、はやくも資本主義の経済的構造を予見

したという偉い経済学者というように評価されています。ところで、その理論内容は、タプロウ・エコノミク（経済表）として有名であります。これも要するに、農業労働が国家の富を形成するという因果関係を、分析的な研究過程から新たに打ち出したものというように解釈できるわけです。そして、その簡単な一つの「経済表」なるものは、農業労働から生み出された新たな富が、製造工業者や地主などの間で、どのように形を変えて、循環するか、ということをし、したがって国家ないし国民の色々な富の形態全体を演繹的に説明したものであります。そのかぎりでは、そこに一つの体系的な理論が成立しているということができるわけです。そういうつもりで図表（Ⅲ）では、点線で上向的叙述として、それを示しておきました。ところで、こういう理論体系が、なぜ、当時のフランスにおいて打ち出されることになったのかと申しますと、この当時では、生産物としての新しい価値を作り出すのは、人間の労働だけでは不可能なので、そこには、やはり、自然の恩恵を受けていなければならないという思想が農業に従事する国民大衆の世界観となつて、これが、この体系的経済理論の根底に据えられていたというように考えねばな

りません。それとは別に、いまここで皆さんにお話ししておいて参考に提供しておきたいと思うことがあるんですが、それは、当時、イギリスのハーヴェイがルネッサンス以来の解剖学と生理学とを結びつけるための動物の身体と血液の動力学的研究を、やっていたということです。ケネーもハーヴェイと同じく医学をやっていた関係から交遊があったし、ハーヴェイの血液の循環の生理学的説明がケネーに暗示を与えることになって、そして、いまだ絶対主義の段階にありながら資本制的な経済循環としての「経済表」を作製することも可能でありえたということです。とにかくとして、当時はまた

フランス革命が起こっていない段階なので、封建的な支配のもとでの農業が盛んであったという、そういう時代的な背景もありました。そのために、すなわち、自然の恩恵を受けた人間労働、これこそが唯一の国富の基礎であり、原因となるものだという因果関係が当時の経済学者の研究過程において、打ち出されました。現代のわれわれから見ますと、農業労働というものは、人間のなしうる色々な労働のうちの一つの特殊な労働にすぎないのですが、しかし、それにしても、国富の原因を、重商主義の経済学が、流通過程に求めるにとどま

資本論における方法と世界観（上）（梯）

っていたのにたいして、生産過程にまでおろして追究したということは、大きな意味があるわけですね。ところで、このように生産過程のうち求めた国富の原因を、農業労働に限定するのではなくて、さらに拡げていって、労働一般としたのが、スミスであって、それから、この立場の理論を徹底させるのが、リカードであるし、これらの二つの学説を併せて古典経済学と呼んでいることについては、皆さんも御承知のとおりであります。

このスミスの考えでは、自然の恩恵を直接に受けていなくても、人間の労働だけで、富を作り上げることができる。特殊な農業労働だけでなく、その他の特殊な労働、たとえば運輸労働、製造工業の色々な労働など、どんな形態の労働でもいいといういみでの労働一般が、国富の原因になるべきだ、ということです。要するに、国民全体が勤勉な人間として大いに働けば、その国の富は増えるんだ、というわけです。スミスは、産業革命の直前の経済学者なのでしたから、その当面の敵が、まだ絶対主義の体制であったし、この絶対主義のイデオロギーとしての重商主義を当面の批判の対象としていたわけでありました。この絶対主義の段階では、なお封建的

九九（九九）

な遺制が強力であり、王族、貴族、僧侶などの大土地所有者が政治的ヘゲモニーを握っており、これにたいして第三階級としての商工業者が立ち上がって政権に参与しようとする。

そのばあい、労働者は、雇われるものと雇うものとの違いとして、商工業者階級とは区別さるべき関係にあったのでしたが、この区別が対立にまで表面化していない段階なので、第三階級として一緒にあって絶対主義の体制に向って戦ったのであります。ところが、リカルドの時代に至ると、イギリスにおいては、チャーチスト運動という形で各業種の労働者は、全国的な組織をもつことになり、階級的自覚をもち始めるということになる。こういう十九世紀に入った段階では、もうすでに、スミスのいう国富は、国民全体の富ということではなくして、資本家的富として誰の眼にもハッキリ判るようになってくる。この転化した経済的、政治的状况を、そのままに反映して、リカルドは資本家的富の原因を追求するわけですが、そのばあい、この資本家階級の富は、全部、やはり働く労働者が作るんだというスミスの因果関係の思想を貫いて受けついでいます。そうしますと、スミスのいうとおりに、特殊な農業労働だけでなく、いかなる形態の労働をも、すべ

て含むところの労働一般、これが資本家的富の原因ということになります。このことを、図表の(Ⅲ)で、「国富 \downarrow 資本家的富」というように表わしておいたわけです。

そして、この図式における上向的な演繹的思惟は叙述の過程です。それから、スミスならば『国富論』、それからリカルドの場合には『経済学原理』という著述が、これ(Ⅱ上向的な叙述過程)になっておるわけです。

そういう意味で、この方の図式—図表(Ⅱ)—と同じように、自然科学の領域で研究者が、それぞれの研究対象について、その現象形態を観察し、下向的に、分析的思惟を働かして、最後に原理を仮説として立てて、そして、それが真理であるかどうかを論証するために、後方への旅としての上向的に演繹的思惟を働かしてゆくということは、これは、自然の領域の色々な特殊科学を体系化せしめたものですが、同じように、それは、科学としての学問の体系を成り立たしめるための、経済現象を研究しようとする研究者たちの頭の働かし方、方法論でも、同時に、あったわけなのです。このようにして、スミス、リカルドの経済学の理論内容は、近代に発生し、発展してきたところの経験科学としての経済学

を、方法論的に体系化し、この体系化を完成したと、いうことができるのであります。このいみで、古典経済学という名称が、マルクスによって与えられていた、というように考えるべきだと、ぼくは思っているのです。たんに方法論という形式のうえでのことでなくて、その理論内容において古典的とよばねばならない点も、あるのですが、この理論内容の点、いいかえると、スミスとリカルドとで、これらの理論内容が、どういう点で、どういうように違い、どういう点が、スミスからリカルドへと発展的に受けつがれているか、というようなことは、本日の講義では、時間の関係上、省略させていただきます。そして、たった今、申し上げましたように、ニュートン物理学において完成したような古典的な自然科学の方法論的体系が、経済学の領域でも、社会科学の方法論的体系として、したがって、実証性の面と合理性の面とを不可欠の契機として兼ねそなえた体系として、スミスおよびリカルドによって、完成することになったという点だけに、今日の講義は、その焦点を当てておることを、ご諒承していただいたと存じます。そういう意味のものとして、図表の(Ⅲ)の図式で、古典経済学の上向的叙述過程を、実線で示

しておいたのであります。

そこで次に、このような経験科学の一つである経済学の、その方法論的な体系が、本日の講義の核心になっているところの、『資本論』において、どのようになっているか、という問題に入ってゆかねばならない、ということになるのですが、この『資本論』が、たしかに一面においては、経験科学としての経済でなければならぬものとされている以上は、図表(Ⅲ)で示してあるように、近代科学一般の方法論的体系をもっておらなければならぬ、ということになります。というのも、事實上、『資本論』は、近代科学としての古典経済学をアウフ・ヘーベンしたものととして成立しているからなのです。しかしもう一つの面として『資本論』には、ヘーゲル哲学の方法と体系とが同時にアウフ・ヘーベンされている、ということ忘れてはならない。そこで、これから、この面のことについて話しを進めてゆきたいと思っているのですが、そのまゝに、さきほど話しかけたところですが、リカルドの経済学にハッキリと出てきたところの資本制社会に固有の階級関係について、もう少し付け加えることにして、お話しを、この方向へ進めたいと思うのです。

五 賃労働者の実存形態

さきほど話しかけた階級関係なるものは、要するに、こういうことになります。リカルドは、あきらかに資本家階級の立場にたっていたのですから、賃労働者階級とは敵対関係にあります。理論家としてのリカルドは、たしかに、大地主階級の代弁者としてのマルサスと有名な論争をやっておりすが、これらの二人の学者は、労働者階級の利害を、自分たちに都合のよいように逆用して、それぞれの理論を展開しただけのことです。リカルドもマルサスも、ともに、当時のイギリスの労働者階級から搾取したところの、利潤なり、地代なりで生活していた支配階級を代弁していた経済学者として、これらの理論を展開していたことに問題はない。いま、ここでは、マルサスのことや、マルサスとリカルドとのあいだの論争のことについては、これも省略することとして、リカルドだけについて、さきに話しかけた階級関係のことに、お話しを絞りますと、そういう階級関係が、だれの眼にもハッキリと映ってくるようになっていた十九世紀の初期において、賃労働者階級と対立した資本家階級の立場にたつて理論を展開

したリカルドの頭のなかには、ひらたく言えば、「お前たち労働者よ、大いに働け！ そうすると、おれたち資本家たちは、ますます富裕になるのだ」というような考え方なり、思想が、あつたはずで、この思想における、労働一般と資本家的富とのあいだの因果関係は、当時の地主層を含めた支配階層全体の世界観であつた、といえるでしょう。しかし、このばあい、この階級関係において、逆に働かされる労働者の立場に立つてみると、おれたち労働者は、いくら働いても決して富まないどころか、いつまでも貧乏のまま、いるではないか、おれたちの労働は、いったい、なんのためにあるのだ、という疑問が、当然出てこなければなりません。このような疑問を孕んだ世界観を、十九世紀に入ったイギリスの産業資本主義社会にたいして、労働者のひとりひとりは、いまや共通して、持っていたはずで、おれたちが一生懸命に働くことと資本家が富む。そして依然として、おれたちは貧乏だとすると、おれたちの作った生産物のすべては、資本家のものになるにすぎないのか。資本家のものを、おれたち労働者は、一生懸命作っているのではないか。そういう労働は、資本家のための労働であつて、自分のための労働で

ない。労働というのは、自分の生命力を發揮する、そうであるとする、自分が生きる、ということなのでないのか。それとおり、実際において、労働者が生きるということの本質は、マルクスも『経・哲手稿』で述べているとおり、労働するということではなければならないのであります。自分の生命力を外に現わしたことが、自分のためにならずして、他人のためになつてゐる、ということ、このことは、労働者の資本制社会における本質的生活が、喪失させられてゐる、すなわち、自己疎外におちいつてゐる、ということ、いみじてゐるのであります。

本来、労働というものは、働けば働くほど、それだけ自分の人間的な生命力を發揮しているといういみで、自分の生活を人間的なものにさせ、人間を人間たらしめるところ、人間生活の本質的なものであります。たとえば原始共同体においては、働いて得られたものは、自分たち仲間のものになり、仲間の共同所有になり得る。したがつて、社会生活は、ますます豊かになつて、その限りにおいて、労働することとは楽しいことであつたわけです。ところが、資本主義の社会のみならず、それ以前の階級社会になると、働く者は、奴

隷制社会においては奴隷、封建制社会においては農奴、そして資本主義社会においては賃労働者なんです、こういう階級社会において労働する者は、要するに、自分の作つたものは自分のものにならない。そして、いくら働いても生活は楽にならない。働けど働けど、じつと手を見るというような啄木の歌が出てくるゆえんも、そこにあるんで、これが本来ならば、労働者に喜びを感じなきやならん人間が、階級社会に入ると、本来の労働の喜びということは失なわれて、労働することはいやだ、そして、ベルが鳴つた、ああ、やれやれというんで、すぐに職場から出て、そして、やつと自分の自由な時間を味う。きみたちの授業というのも、ちょうど、これと同じなので、とにかく、辛棒して講義を聞いている。そして、ベルが鳴つた。それでほつとする。ほくが、いつでも、ベルの鳴つたあと、続けて講義をやっているのに、もうテキストを閉ちて、そわそわしているんだね。これなどは、まさに、授業は苦しゆうて、授業せんときは、自由で楽しい、というような状態を示しています。これが、自己疎外ということなのです。このように、学生として本来の姿を喪失していることは、立命館の学生諸君のみならず、全国の大学の学

生諸君にも、共通した一つの現実の姿であります。

労働の場合も、そういう意味において、労働の自己疎外という状態が、階級社会では普通のこと、一般的なこととなっております。だからスミス、リカードにおいて、国富ないし資本家的な富の原因が労働一般である、という因果関係を描いたたてにしても、ここに、マルクスの立場とのあいだに、世界観の相違があったことに、ぼくたちは気付かねばならぬ。スミス、リカードは、すくなくとも資本家の立場に立って、おまえたち労働者は勤勉な人間だ、よく働け。そうすると、国家は富むんだと、スミスは言ったんだが、実は、このばあい、国家というのは資本家階級のことなんで、資本家階級は、ただ、労働者たちにたいして大いに働けと主張していた、ということになる。そして、こういう立場が、じっさいにおいて、リカードになると、もう一つ明確なものになってきているのであります。

そこで、こんどは逆に立場を変えて、働く労働者の立場、勤労者の立場にたつて、そこから、富の原因が労働一般から成り立っているという因果関係を見ると、どうなるか。マルクスも、この因果関係を科学的な遺産として高く評価し、こ

れを、そのまま受け継いでいる。しかし、この継承するばあいの立場が違う。同じ産業資本に対する見方、世界観が、異なっている。それは労働者の立場に立っている。リカードおよびスミスのばあい、とくにリカードにおいては、はつきりと資本家の立場に立っていた。もちろん、このリカードの学説は、リカルディアン・ソシアリストに転化しようという、資本家の立場に立っていたにしても、学説そのものは、ぎりぎりの社会主義を、その後継者のなかに生むような性格の学問であったのですが、そこが単に資本家階級の奉仕するだけの、くだらんイデオログ、代弁者すなわち俗流経済学者でなくて、すぐれた学者であるということを証明するわけなんです。その辺のところは、学説史専門家の先生がたから詳しく教えられていることと存じます。ぼくとしては、これを機会に諸君が、そうだろうかという疑問をもってくれたら、それだけで、今のばあいは、けっこうなんです。そして、そういう疑問を諸君自身が自分で解明しようとして、あらためて学説史の講義を聞くと、その聞き方の態度が違ってくるはず。そして、色々の学説のなかに秘んでいる方法論が、どういふものかということ、積極的に意識するということ

になるわけなんです。

さてマルクスのばあいには、国富の原因としてのこの労働一般は、労働者の立場でいえば、資本家のためになっても、自分たちのためにはならない。労働一般そのものが、本来の姿を喪失している、自己疎外におちいつている、ということになるわけです。この自己疎外は、労働者が資本主義社会に実存しているかぎり、おちいるほかない運命にあるのです。

ここで実存という言葉を使ったのですが、このことを詳しく説明しようとすると、話しが長くなるので、とりあえず、いまのところは、それが実在と違うというように考えていただけで結構でしょう。物ではなくて人間が、自己意識をもっている人間が、存在しているということが、実存ということなのです。簡単にいえば、そうなるんです。実在というばあいは、われわれの意識の外にある物について用うる言葉なのです。しかし、そのいみで人間という実在してるわけなんだけれども、この実在が、人間という実在が自己反省するという場合にも、とくに実存という言葉を用いなければならないのです。

この実存 *Existenz* という言葉は、ヘーゲルは勿論、マルクスも『資本論』で、盛んに使っています。ただ、これに主義

資本論における方法と世界観(上)(梯)

という言葉がつくと、実存主義という一つの哲学的な立場になって、マルクス主義とは区別されねばなりません。この実存主義の立場の思想は前世紀において、ヘーゲル批判として出発しています。それは、まず、ユンゲ・ヘーゲリアーナーの一人としてのスチルナー、それよりもケルケゴールが、もう一つ徹底した思想家でした。二十世紀にはいつて、しかも現在ではサルトルが、その一方の代表者として挙げることができます。第二次大戦後にサルトルは、実存主義はヒューマンイズムである、ということ宣言するわけですね。それから、うちの経済学部の学生諸君のレポートなんかを読んでみても、サルトルの影響が非常に大きいことが解ります。しかし、ぼくが今、実存という言葉を使ったからといって、それが、そのまま実存主義の哲学に近づいているというのは間違っています。マルクス主義の哲学的立場にあつて、なおかつ、労働者が資本主義社会に実存しているという必要があるのは、その労働者というカテゴリーの論理構造そのものから由来するのです。資本主義社会において労働者は、人間としても実在していることに、問題はありませんが、このことは、経済学的に厳密にいうと、その労働力が商品として実在

しているわけなんです。人間として生きるためには、労働者は、何物ももたず、そのかぎりで、自分自身の生命力を、その何時間分を商品として資本家に買ってもらわなければ、そして、そのことで得た賃金によって生活に必要な物資を色々買わなければならない、ということになっている。われわれ勤労者の生活も、だいたい、そういう経済的構造のなかにおかれています。きみたちのおやじなりおふくろは、敗戦直後に戦争で焼け残ったものを売り食いして、そうして、きみたちを育てて、ここまできた。そういう点では、きみたちは、両親に孝行せにやいかんと思うのですが、あんがい、このごろの子供は、孝行するというようなことは、よほどの例外をのぞいて全く意識していない。ぼくのばあいも、子供に孝行されるというようなことはないで、逆に子供につかえてきている。子供は自由自在と気の向くようにやっておつて、子供たちが自由自在に個性をのぼすことをささえるために、おやじが定年になつても、まだ稼がねばならないというような、ちょうど、親が奴隷であつて、子供が自由民になつていくという具合に、戦後の日本の各家庭は、一般に変化してきている。これは、ギリシヤ、ローマの時代に逆転してるとも、

いえそうです。

お話しが、また脱線いたしました。とにかく労働者は、資本主義社会において人間として実在するためには、なんにも持たない無産者として、自分の肉体的な、精神的な労働を、何時間分か商品として売り出す。ところで、この自分の生命力、すなわち精神的、肉体的なエネルギーは、自分自身のものであり、自分自身であり、自分の人格そのものであります。それが、ここにあるコップとかチョコレートとかボールドとか紙とかいうような、物としての商品と一様に扱われる。一様に扱われるということは、これは、経済学で価値法則に支配されていると言われていることを、いみしている。しかし時間ぎめで売られる労働力の総体としての労働そのものは、依然として人間としての労働者の生命であり、人間そのものである。だから物として扱われておつても、本来は人間性、人格であることを認めなければならない。ところが資本制社会において、賃労働者の人間性ないし人格が、現実には物として扱われている。このことは賃労働者の人間としての本来の姿が喪失されている。すなわち自己疎外におちいつている、ということはいみしています。この自己疎外の状態にあつては、

論理的にいいますと、疎外されている本来の自己を必らず回復せねばならないということになります。いいかえますと、賃労働者の社会的実在の仕方が、物としての商品であることが、車実であっても、賃労働者は、やはり人間であるという

自覚を、どこまでも捨ててはならない、ということになりま
す。たとえば、どこかの会社に、きみたちが就職したとして、出世するために上役にへいへいする。それは、きみたちが、きみたち自身の全人格を売り渡した、ということになるんですね。いつのまにか奴隷根性の持主になっているわけですね。学生ときには、両親を奴隷にしておいて、そして四年間は、自由人として生活して、一旦、就職すると、その途端に、上役に奴隷根性を発揮する。これは、なさない事実なんで、勤務時間中は、まじめに働く。しかし勤務時間を過ぎたならば、自由な自分自身に戻る。この自由の時間のなかで、麻雀をやってもよろしいし、酒を飲んでもいいし、また『資本論』を読んでもいい、というわけです。しかし願わくわ、勤務したのちに多少は休養したり遊んだりするにしても、すこしでも勉強するということを、ずっと続けてほしい。教員というのは、あまり説教せん方がいいんですが、ついでに

資本論における方法と世界観（上）（梯）

口がすべったままでのことです。とにかく、そういう状態にあるかぎりにおいて、ぼくたちも疎外されてる人間性というものを、つねに取りもどす意識を、もっていなきゃならんということに、なるわけなんです。

とにかく、労働者が、その労働力が、資本主義社会において商品として実在していることは、これこそは、まったく疑いようのない事実であって、このことがなければ、労働者は資本主義社会において生きることができない。けれども、この賃労働者が、自らの人間性を常に確保しようとするためには、自らの商品という実在性を否定しなきゃならん。だからといって、商品的実在性の否定ということのために、資本家に雇われるということを、やめるとなれば、人間として現実の資本主義社会に生活することはできないんで、これも事実であるけれども、同時に、心のうちに、あるいは生活態度として、自分の人間性を最後まで守るという意味において、商品的な実在性を否定するという意識をもっていなければならぬ。このことは、たしかに一つの自己矛盾であります。いいかえると、一面で商品的実在性を肯定しながら、同時に他面では、それを否定しなければならぬ、というこの自己

矛盾は、しかし資本主義社会において賃労働者の生活するということ、そのことの論理構造なのであります。この自己矛盾にあって、商品的実在性を否定するのだからといって、労働時間をサバるというんじゃないくて、商品として自分の労働力を売った限りでは、その使用価値を百パーセント消費するように努力する。でなければ、価値法則に照らして、あいつはなまけ者だと批難されることになる。労働者じゃなくて、きみたちの場合では、このごろ初任給が、だんだん上がって、高校生も三万五千円というような相場になっていくわけですね。しかし半年ぐらいうると、あいつは大学を出ているわくせに、なんにもできないというのは、もう首にしろ、ということと追いつかれるほかないでせう。だから一旦、雇われたかぎりは、ここで模範的な職業人なり、労働者なりになるべきなのであるが、それにしても、しかし、心のうちでは、自分の人格を売り渡した奴隷とは違うんだ、という意味において、商品の実在性を否定するという心構えを、しょつちゅうもつていなきゃならない、という論理構造におかれてあるということなのです。こういう心構えを、自分の人間性を確保していなければならないという意識を、もっているか

どうか。あんがい、もっていない人が労働者の中にも多いんでなからうか。そのなかで、こういう自己意識を、もつていたったときに、自覚的な労働者になるわけですね。ところで、こういう自己意識を持っている、あるいは持たねばならないものとして、賃金労働者は、たとえ人間としてであつても、物と同じように、資本主義社会に実在していながら、この実在において、自己否定的に反省する人間として、実存していると言はねばならない、というわけなんです。

労働運動にしても、この商品的実在性の面において、ただ単なる賃上げ斗争に限るということ。これも絶対に必要なことであるが、しかし、この賃上げ斗争そのものなかにあつて、人間的存在を守るための、この商品的実在を否定するという面が、同時になければ、真の労働運動ということにはならない。このことを、ひとりひとりの労働者についていえば、勤務時間中は自分の労働力が商品であることに満足して、勤務から解放されたら人間としての自由を取りもどしているというんでなくて、働いてるうちにも、すなわち生産点においても、おれは奴隷じゃなくして、自分の人間性を固く守っているという自覚を持ちながら、そして、まじめに働

く。これが、いま申し上げた労働者としての自己矛盾を解決してゐる姿なんですね。このように自己矛盾を解決しようとする行動をもっているところの一人一人の労働者の結集が、真の労働組合である、というべきでないかと、ぼくは思っているのです。

お話しは飛躍しますが、一人一人の労働者が、それぞれの自己矛盾に気づいたときに、どうしようか、ということになる。自分の商品的実在性において賃上げ斗争に専念すべきか、賃金が低くても人間性を高めるべきでないか、という岐路に当面して、どっちに重点を置こうかというばあいには、そこには、労働者個人個人において具体的な色々の不安や悩みが生じているはずで、悩み抜き考えあぐんで、どうにもならず、ああ、めんどうくさいからといって、酒でも飲んで、その日その日を過ごすというふうなことになる。賃労働者としての自己矛盾について、このような自覚に不徹底な労働者、あるいは、全く無自覚な労働者、あるいは逆に、徹底的に自覚した労働者、これらを含めた労働者階級一般の立場になって、そして、資本主義社会全体を見る。直観する。そうすると、当然ながら、これは、資本主義社会の全体を、否定

資本論における方法と世界観（上）（梯）

的に直観する、ということになる。そして、その全体の経済的構造を労働者に代わって、科学的に分析したのが、マルクスであったのだ、というように、ぼくは、まえまえから主張してきているんです。

マルクスが、このような科学的分析をやって、その研究成果としての多くの理論を、体系化したのが『資本論』なんです。その方法的な体系を、とりあえず簡単に図式化したのが、これ（↑ききに掲げておいた図表↑）なんです。これによりますと、その叙述内容は、いわゆる上向的な叙述過程として、ただ一本の曲線で非常に簡単に示してありますが、実は『資本論』全三巻の叙述の展開過程を、いみせしめているものものなんです。その全叙述の最後のところにおいては、資本家階級の富は、すべての労働者の労働から搾取されたものである、という階級関係が理論的に展開されている。これだけのことならば、第一巻の最後のところでも、十分に理解されることになっていますが、さらに第三巻のいちばん最後のところでは、資本家、地主と賃労働者の三位一体の信条が批判されて、資本家階級と労働者階級との二極としての、その階級的な対立ないし矛盾しかないのだ、ということが展開

されているのであります。そして、この階級的矛盾の解決は、賃労働者の側の一人一人が、それぞれの階級的自覚をもって、そのかぎり、労働者階級の一員として団結することによって、そのことによる階級斗争によってのみ、解決されるという事になっております。それと同時に、いままで申し上げてきたところの一人一人の労働者の不安、動揺というものが、はじめて解決される、という論理構造になっております。いかに言いますと、個々の労働者の、こうした主観的な心情は、階級闘争の場面では、客観的な階級の普遍的意志にまで、アフ・ヘーベンされる、というわけなんです。そういうような実践的な意味をもった理論的体系が、マルクスの『資本論』なのであります。

このような『資本論』の理論内容を展開しているところの、その方法的体系については、これから、もっと詳しく話してゆかねばなりません。図表（一）として図式化されているところでも、ただいま申しあげたことを、皆さんは念頭においていただきたい。そうしますと、資本家的富の全体を、その現象形態において観察する認識主体としての賃労働者は、現実には、その実在性の面では、労働力商品として資本家的

富の一要素となっている。それだけでなく、資本家的富を作り出す原因としても、労働力商品は、資本家的富のなかに現実に実在している。このことの認識は、労働一般が原因で資本制的富は結果であるという因果関係についての理論的認識は、マルクスが個々の賃労働者に代って、リカルドの経済学を批判的に研究した結果において出てきた結論であることは、さきほど来、申し上げたとおりであります。しかし、このように、資本制的な富の色々な形態の一要素であり、また、それらの原因でもあるところの、賃労働者たちの労働力商品は、いや、この労働力商品の所有者としては、同時に、他面では、人間として自分自身の人格を、個々の資本家すなわち雇傭者にたいして、平等なものとして、そして、この人格の自律性における真の自由を確保しているのではありません。近代的な市民としての資格をもったものとは、いえなはず。ところが、近代的な一市民として、資本主義社会という環境のなかに、生活するために、賃労働者は、さきほどから申ししてきたように、自分の人格の内容としての生命的、および精神的なエネルギーを、時間ぎめで商品として売りださなければならぬ。そして、商品として売りだしたが、

の労働力という実在は、物としての他のあらゆる商品と同一にあつかわれて、そこに価値法則に規制された経済的運動に捲き込まれていく。このような商品的実在性だけのものとしてあるかぎりでは、賃労働者が、労働という、人間としての本質的な行動ないし生活をしていることを忘れる、いいかえると、本来の人間性を、自分自身の人格そのものを、忘れ去る、ということになるわけでありませう。

このように賃労働者が、資本主義社会において、実際に生活しているときに、本来の労働ということの意味を、これが、賃労働者の労働する人間としての人格であるのですが、この労働者の人間性という意味を、自分自身で失っている、自己喪失している。このことが自己疎外におちいっている、ということなのです。賃労働者が現実には、その日常の勤務する時間だけでなく時間外においても、こういう自己疎外におちいっているかぎりでは、さきほど申しましたように、この疎外の状態から、自分自身で脱けだすという努力を、すなわち、疎外状態からの自己回復への努力を、せねばならないという論理構造にあります。このことは、賃労働者が、自らの現実の商品的実在性を、その実在性の肯定のうえで同時に否定す

資本論における方法と世界観（上）（梯）

る、ということになります。これは、自己矛盾というべきことなんだが、この自己矛盾は、資本制社会において生活している賃労働者の、それ自身の論理構造であって、どうにも致し方のないことなのです。このことについては、たった今も、具体的な例でもって説明してきたところではありますが、こういう自己矛盾的な論理構造にある賃労働者が、産業資本主義の段階の経済社会を研究するにあたって、その現実的出发点に位置づけられて、そして、この研究のための認識主体とせられたところのマルクスの『資本論』なる体系が、打ちたてられることになった、というのが、ぼくの『資本論』解釈における基本的な姿勢なんです。

このような解釈が、正しいか、どうか、ということについても、これから順を追って、お話しをやってゆくつもりですが、ここで一応の締めくくりをしておきますと、いま申しましたような、自己矛盾的な論理構造をもった賃労働者が、研究の現実的出发点に立って、資本制社会の富の全体を直観するときには、たしかに、それは、マルクスのいうとおりに「全体の一つの混沌たる表象」にすぎません。しかし、そのように直観する認識主体が、自分自身の存在の自己矛盾的構

造からして、「一つの混沌たる全体表象」として頭に浮べられた資本家の富の全体をば、自分には疎遠なもの、自分の所有とは凡そ無関係のものと、というように受けとっているだけでなく、その富の全体なるものが、自分たちの労働を原因として出来あがっているものと、すこしでも認識をすすめたかぎりでは、この資本制的富の全体を否定的に直観することになっているはずだ、というように言うことができるでしょう。この否定的直観こそが、資本制社会のなかに労働し生活する賃労働者の、当然ながら持っているはずの世界観でなければならぬ、といういみで、この、さきの図式(Ⅰ)で、そういうものとして示しておいたのであります。要するに、この賃労働者が最初から抱えている世界観なるものは、資本家の富の全体についての「一つの混沌たる表象」でありながら、同時に、この全体表象の否定を孕んだ直接的な意識状態である、ということになりうるのであります。

このことを、もう一つ哲学的な表現を用いますと、感覚的實在を否定的に直観する、ということになります。感性的直観は、たとえばカントにおいては「雑多な諸表象」として肯定的に考えられていました。そして、この「雑多な諸表象」

の全体として直観される現象世界を、そのまま肯定して、それで終るといふのでなくて、これらの諸表象を整理、加工してゆく科学的分析といふことを、カントは考えていたのです。が、しかし、そうではなく、そのような分析という思惟作用を加える以前に、いいかえますと、思惟を媒介する以前の直接状態の意識において、現象世界の背後の本質を、しかも、現象世界の全体を説明しようような、そのような可能性のある本質的なものを、ぼくたちは、掴むことができるのか、ということなんです。すくなくともヘーゲルのいったような、最後の発展段階で現象形態の全体の具体的な姿が演繹できるような、そういう最初の貧しい規定性しかもたない、たんなる萌芽形態なり、たんなる可能性なるものを、いいかえるとヘーゲルの論理的端緒なるものを、カントの感性的直観において、同時に直観しえている。こういうのが、むしろ、ぼくたちが日常経験しているところの、普通の直観といふことの正しい論理構造でないか、というのが、ぼくの考え方なんです。すくなくとも、現実社会において自己矛盾を感じている人は、たれでも、このような直観をしているはずだと、ぼくは信じているんです。

そこで、さきに申しておきましたような、自己矛盾的な論理構造を、資本主義社会での生活そのものにおいて、持たされている賃労働者こそは、このような自己否定的な本質直観をやっているのだ、そして、マルクスは、このような直観を造からして、「一つの混沌たる全体表象」として頭に浮べられた資本家的富の全体をば、自分には疎遠なもの、自分の所とは凡そ無関係のもの、というように受けとっているだけでなく、その富の全体なるものが、自分たちの労働を原因とする賃労働者の立場にたっていたかぎりで、最初から、そして『資本論』を書くときにも、賃労働者の自己矛盾的な直観ということを、認識論的に承認していたと考えねばならないのであります。そういういみで、ぼくは、図表(一)で、このような否定的直観を世界観として、この個々の賃労働者が共通にもつところの普遍的な世界観が、かれらの意識のなかで対象化されうるはずの世界像を、マルクスは『資本論』の冒頭の文節として成文化したのだと、ぼくは、さきほどから言ってきたわけなのであります。

ついでに、図表(一)において、また、図表(Ⅲ)において、商品からの上向的叙述の過程を、半円形の曲線で示して

資本論における方法と世界観(上)(梯)

あるのは、マルクスがヘーゲル哲学の体系的思惟様式をアウフ・ヘーベンしたことを意味するのですが、このことについては、これから、お話しをしてゆかねばならぬところなんです。ただ、まえの図式(一)についてだけの補足的な説明を、ここで付け加えておきますと、賃労働者の念頭に浮べべき普遍的な世界像が、それは最初から正しいのであるとしても、それを一歩一歩と順を追って具体的な姿にしてゆこうとする、その過程が、すなわち、総合的な演繹的思惟の自己展開という上向的過程が、そこに示さされている、ということとであります。このことについても、これから、お話しをしてゆくつもりになっているところなんです。